（発行所）
青山同窓会
〒951-8127新潟市関屋下川原町2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL 025-266-5268
FAX 025-266-5268
（編集・発行人）
上村光司
（印刷所）
オリオン印刷株式会社
〒950-0963新潟市南出来島1-19-1
TEL025-283-2151
FAX025-283-3804

ごあいさつ

会長　上村光司（50回）

新年おめでとうございます―と大声で言えないような気分が、ここ二、三年続いています。経済効率という怪物が地球を徘徊し、日本列島モノ作りの空洞化は際限もない。これも過疎化が進むわが口中をさぐりながら、行く末を思案したりしています。しかし難局こそ実力発揮のとき。健康にご注意のうえ、新しい年を切り開いてくださることを期待しています。

このような時世にも、母校への皆様のご厚情は変わらず、お蔭さまで校舎竣工と創立百十周年の記念事業は計画どおりに行うことができました。平成十三年十月二十日、その記念式典で私が申しましたことを以下で載せて、改めて皆様へのお礼のごあいさつといたします。

◇　◇

きょう、このようにたくさんの方々においでをいただいて、校舎竣工と創立百十周年の記念式典をあげることができました。本当に嬉しく、ありがたいことであります。

高い場所からですが、皆様方にお礼を申し上げたいと存じます。

まず県、県教育委員会、県議会に対しまして―。前の校舎が老朽化したことに対する処置には、幾つかの選択肢があったと思いますが、現在地での全面新築という方針を早々と打ち出し、工事に着手されました。その後の経済情勢の変化を考えるとき、早期のご決定はありがたいことでありました。

次に、同窓会、PTAはじめ学校に関係する皆様に、改めてお礼申し上げます。

生徒たちに、出来るだけ良い環境で、勉学や体育にいそしんでもらいたいと、校舎内外の環境整備のための募金をお願いしました。これも世の中いろいろと厳しい中で、当初計画どおり多くのご厚意を頂戴しました。このステージの緞帳も、その一つであります。ありがとうございました。

ところで、私が旧制中学の五年生のときが創立五十周年でした。昭和十七年、大戦争の真っただ中で、教練用の小銃などをおさめる銃器庫の、機械油のにおいを、今もおぼえています。建築後二十年の第二代の木造二階建校舎でした。

その校舎が、昭和二十九年の四月四日、第一体育館を残してほぼ全焼してしまいました。当時県の財政は窮迫していて、建築費の半額を地元負担という状況でしたが、火災に強い鉄筋コンクリートにしたいということで、同窓会もPTAも教職員も、建築費作りに知恵と汗をしぼって生まれたのが、先代の校舎でありました。

さて、在校の生徒の皆さんに先輩の一人として一言申したい。この新校舎は校歌に「名さへ耀ふ青陵の、伝統遠き丘の上」とあるように、いまお話しした先代の校舎のことなども織りこんだ、創立以来百十年の歴史が下敷きになって、このような姿で生まれた―そのように私は考えます。

先週の青山祭には、このアリーナを使うことが出来ました。来年の青陵祭は伸び伸びとやれるでしょう。新校舎は、皆さんが高校生活を営むのに、必要にして十分な条件を備えていると思いますし、今後相当長い間、県内の高校のモデル的なものになるはずであります。この全機能を生かして、充実した日々にしてください。

昔、中央アジアのフェルガナに産した優良馬に、一日に千里を走り血のような汗を流す「汗血馬」と呼ばれた馬がいたと言われています。小泉首相が大改革に立ち向かうなか、我々も原点に立ち返り、ソフト・ハード両面に渡って「汗血馬」の如く本気の努力をする時期であると考えています。

松の木を形どった校章も融和と団結を意味すると聞きます。青山精神を念頭に母校を誇りとし精進して、思いの叶う年と定め共に頑張りながら、同窓各位のご健闘を願い、母校の発展を祈ります。

新春のご挨拶

「汗血馬」の如く

衆議院議員　吉田六左エ門（66回）

青山同窓会の皆様、明けましておめでとうございます。

昨年は一方ならぬお世話になりまして、本当にありがとうございました。本年もあいかわりませずよろしくお願いいたします。

昨年は誇りある百十周年と新時代に即応した教育の場として、ナンバー・スクールに相応しい新校舎竣工を、大先輩から現役生徒の皆さんと祝うことができました。

改めて、我が母校の歴史の重さを感じ、次時代に向けて働かなければならない、こんな思いを強くしました。（今生きるものの役割と責任）こう言った思いで皆様も爽やかに新年をお迎えのことと存じます。

今年は午年、飛躍を意識して願うことは勿論でありますが、

「青山同窓会名簿」を十年振りに、九月刊行致します。

昨年暮れに、第一次調査カードを全会員に郵送致しました。調査カードのご返送と情報提供のご協力お願い致します。

また同窓会名簿は完全予約限定出版です。（一部五千円）この機会に是非ご予約下さい。また広告協賛のページがありますので、そちらの方もご協力お願い致します。

新春のご挨拶

更なる飛躍を

新潟市長　長谷川義明（61回）

青山同窓生のみなさん、新年あけましておめでとうございます。

新しい年がみなさんにとって、希望に満ちた、幸多いものとなりますよう、心からお祈りいたします。

昨年は、新潟市にとっても、新世紀の門出を黒埼町との合併とともに迎えることができ、新たな飛躍へと踏み出した、大きな節目となる一年でした。

今年は、待望のワールドカップサッカー大会がいよいよやってきます。

平成八年に開催地の決定を受けてからこれまで、市民のみなさんと共に、全力で準備を進めてきましたが、オリンピックを凌ぐとさえいわれるこの世界的祭典を迎える喜びを、皆さんと共有しながら「新潟のおもてなし」を世界にアピールしていきたいと思っています。

新年は、いつの時も私たちの気持ちを新たなものにしてくれます。

なかなか明るさの見えてこない、厳しい社会情勢が続きますが、各界各分野で、目ざましい活躍を続けられる同窓生の様子を拝見することは、私の大いなる誇りであり、喜びでもあります。これからも皆さんのますますのご奮闘を心からご期待申し上げます。

新潟市も、生活圏の広域的な広がりの中で、都市の魅力を一層高め、市民福祉の更なる向上のため、政令指定都市の実現という大きな目標をめざした広域市町村の合併についての論議が活発に行われ、将来のあるべき姿について、市民合意の形成が図れるよう、努力を続けてまいります。

皆さんの変わらぬお力添えを賜ればと願っています。

待望の新校舎も竣工し、新たな歴史へ歩みを始めた母校へ思いを馳せながら、青山同窓会のますますのご発展と、皆さん、ご家族の更なるご多幸を祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

お礼のことば

学校長　宮沢　稔

青山同窓会の皆様方には、校舎竣工及び創立百十周年記念事業の実施に当たりまして、多大な御厚志をはじめ、記念式典、記念講演会、祝賀会等に、格別のご尽力を賜りまして誠にありがとうございました。心からお礼を申し上げます。

今本校では、二十一世紀の社会の発展に貢献できる人材の育成を目指し、青山百十年の伝統を踏まえつつ、新しい時代にふさわしいスクールアイデンティティーの確立に叡知を結集しているところです。今後とも学校の教育活動に対して、一層のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

校舎改築及び創立百十周年記念式典盛大に挙行

実行委員会　総務　山田　栄（69回）

平成十三年十月二十日、標記の、校舎竣工と学校創立百十周年の二つを記念する事業の集大成として、新装成った体育館で記念式典が挙行されました。百周年に倣う晴天の下、広々とした前庭で純白の六張りのテントを受付所とし、その名も新しい「第一アリーナ」に集まったのは全校生徒を含む千八百人余でした。

ここで、上村光司実行委員会会長（青山同窓会長）と宮沢稔同副会長（新潟高等学校長）の式辞、中村俊生徒代表（生徒会長）のよろこびのことば、そしてそれに続く記念講演の河合雅雄氏（兵庫県立人と自然の博物館館長、京都大学名誉教授）と佐藤幸治氏（近畿大学法学部教授、京都大学名誉教授）のお話を、紙面の許す限り文字で再現してご報告に代えようと思います。また、関連する記事や写真はこの会報の他の場所にも載っています。当日ご来場されなかった方々にも、あの晴れがましい雰囲気の一端を感じ取っていただけるものと思います。なお、上村会長の式辞は、年頭のあいさつに入っていますので、ここでは再掲しません。

また、関連して同日夕刻、午後五時より行われた記念祝賀会は、同窓会の係を主体として運営され、四百二十人の参会者を得て、盛大に行われました。そのうちで同窓関係が二百人でした。これは同窓会総会が既に七月に終わっていた事を考慮すれば大きな数でした。変らぬご協力を感謝いたします。

祝賀会に限らずこのたびの記念事業全体について、主体が同窓会にあったともいえるのですが、物心両面にわたる心からなるご協力をいただき、全ての事業・行事が無事、成功裡に完了したことにつきまして、改めて感謝、御礼をいたしまして、式典の報告とさせていただきます。

記念式典

学校長式辞

新潟県立新潟高等学校
学校長　宮沢　稔

菊の香もゆかしき今日の佳き日に、新潟県並びに県教育委員会をはじめ、来賓、同窓、保護者、その他多数の方々の御臨席のもと、新潟県立新潟高等学校校舎竣工・創立百十周年記念式典を挙行できますことは、この上ない喜びであり、心からお礼申し上げます。

本校は明治二十五年七月一日、県内最初の県立中学校として創立され、新潟市南浜通の曹洞宗中学林の建物を仮校舎として出発しました。職員、生徒がそろい、授業が開始されるのと並行して、ここ青山の地に、新校舎の建設が進められ、翌明治二十六年三月、待望の開校式が挙行されました。当時この辺りはところどころにグミの木が叢生する広漠たる砂丘地で、いまだ人家まばらでありましたが、青雲の志を胸に県内各地から馳せ参じた生徒たちの意気は、新校舎の竣工によりますます上がっていきました。創成期の本校においては、厳しい学業の傍ら、運動、文化の面でも多彩な活動が展開され、その中から次第に質実剛健、文武両道の校風、「青山精神」が育まれていったのであります。

創立三十周年を迎える頃になると、校舎の老朽化おおいがたく、改築に着手、大正十一年、記念式典に併せて、校舎の落成式が行われました。新装なった校舎は、生徒とともに大正、昭和の激動の時代を生き抜いたのでありました。

第二次世界大戦後、本校は、戦前からの「青山精神」を受け継ぎながら、さらに「自主自律」の理想を掲げて、新しい時代へと踏み出しました。教育においては、どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値のあるものがあります。本校創成期から脈々と受け継がれ、時代の変遷の中で形成されてきた質実剛健、文武両道、自主自律などの理想は、これからも継承すべき価値のあるものといえましょう。

しかし、また、教育は、同時に社会の変化に無関心であってはならない。時代の変化とともに変えていく必要があるものに柔軟に対応していくこともまた、教育に課せられた課題であります。特に変化の激しい社会にあっては、このことは極めて重要であります。

昭和二十三年四月、学制改革によって本校は新潟県立新潟高等学校と改称、同年通信教育部を開講、さらに昭和二十五年には創立以来初めて女子生徒七名が入学し、ほぼ現在の本校の骨格が出来上がりました。日本の国全体も昭和二十七、八年頃から、戦中・戦後の混乱期をようやく抜け出し、新たな時代へと発展しようとしておりました。

しかるにその矢先、昭和二十九年四月四日未明、原因不明の火災により、本校は校舎の大部分を失い、一万余の蔵書を初め、青山に学んだ先輩たちの若き日々の拠り所を一気に失ってしまったのであります。幸いにして、県当局の英断により、火災で灰燼に帰した学び舎は、昭和三十五年、県下初の鉄筋コンクリート造りの校舎として甦りましたが、この時の、本校を思う同窓会、PTA、「母の会」の方々の献身的な活動は、今も人々の胸に生きております。以来およそ四十年、本校の生徒諸君は、この恵まれた学び舎の中で、勉学にスポーツに、また青陵祭をはじめとする学校行事に積極的に取り組み、友と切磋琢磨しながら自らを鍛えてきました。

しかし、さしもの鉄筋コンクリート造りの校舎も、昭和三十九年の新潟地震で被災していたうえ、老朽化が進んでいたため、創立百周年の準備に入る頃から校舎改築論議が起こってまいりました。改築に当たっては、移転して広い敷地で、との話もありましたが、長い歴史の中で地域に根付いてきた伝統を重視し、現在地に建築することとなりました。こうして本校第四代目の校舎は、平成九年四月に着工、五年後の本日、竣工記念を迎えたのであります。完成した校舎は、立体的な空間構成により、機能的でゆとりあるものとなっており、全国のどこに出しても誇れる素晴らしい校舎であります。改めて県及び県教育委員会をはじめ、地元新潟市、建築関係者の方々、同窓会、PTAなどの関係者の方々に対し、厚く感謝申し上げます。

さて、校舎建築を中心に本校百十年の歴史の一端に触れてきましたが、これまで本校の学び舎から巣立った方々は三万三千名を超え、その各々が世の中の各方面に活躍し、社会に貢献しておられます。このように一人一人がそれぞれの置かれた場において、その得意とする分野の能力や経験などを生かし、かけがえのないリーダーとして指導的な役割を果たしておられますことは、本校の教育的使命をそれぞれの立場で体現しておられるものであり、喜びにたえません。

今われわれは二十一世紀の初頭に立っております。折しも、同時多発テロ事件や経済不況など、国際社会も日本も、大きな課題をかかえ難しい状況にあります。しかし課題はいつの時代にもあり、これからも当然あることでしょう。問題はこれを乗り切っていこうという高い志と識見を持った人材がいるかどうかであります。国際レベルや国レベルだけではなく、企業や地域社会など様々な社会においても指導的な役割を果たしていくリーダーが今後一層求められていくことでしょう。

ここで私は、生徒諸君に申し上げたい。歴史と伝統はよりよき将来を切り開く力となってこそ、意義あるものとなります。諸君には、本校において、持って生まれた自分の才能を十分に伸ばし人間として大きく成長するとともに、将来、社会の各分野でリーダーとして活躍できる資質を培うよう希望したい。新校舎の建築を機に、県民の皆さんが諸君に期待するところもまた、ここにあると考えます。

現在、教育は、来年度からの完全学校週五日制の導入や再来年度からの新学習指導要領の実施など、一大改革期にあります。われわれもまた、本校の教育的使命を果たすべく、青山のよき伝統を踏まえつつ、新しい時代にふさわしい教育の実践を目指し、さらに一層の精進とチャレンジを続ける覚悟であります。

終わりに、この記念式典に際し、本校発展のためにご尽力いただきました方々に対し、深く感謝の意を表し、式辞といたします。

平成十三年十月二十日
新潟県立新潟高等学校長
宮沢　稔

記念式典

よろこびのことば

新潟県立新潟高等学校
生徒会長　中村　峻

本日は、新潟高等学校創立百十周年記念式典にあたり、大勢のご来賓の方々、そして諸先輩の皆様の御出席をいただき、まことにありがとうございます。在校生代表としてこの場に立てることを、大変光栄に思います。

旧制中学校から始まる百十年という長い歴史の間に、多くの人々がここで学び、そして自らの道を切り開いてきました。かくいう私の母、祖父、曾祖父も本校を卒業し、私で四代目ということになります。

そうした、時の流れの中、校舎も何度か変わり、そして、この百十周年に合わせ、現在進んでいるグラウンド改修を最後に、四代目の新校舎のすべてができあがります。

私は以前の校舎をこの目で見たことはありませんが、この新しい校舎を初めて見たときは、そのすばらしさに圧倒されました。校門を正面に臨んだとき、中庭から上を見上げたときの感動は、今でも忘れられません。この恵まれた環境を与えていただいた、県、同窓、PTAの皆様に、生徒を代表し、この場で心より感謝申し上げます。

さて、先日行われた青山祭で、生徒会企画として「青陵祭かくありき」という、青陵祭に存在する二つの特別賞、ナポレオン賞と赤とんぼ賞の誕生の物語を映画にして発表しました。青陵祭は、皆さんご存知の通り、新潟高校を象徴する伝統行事ですが、「青陵祭かくありき」の準備をするうちに、今と昔の青陵祭は大きく違うことに気付きました。生徒自身で丸太を組み上げる桟敷、時間ごとに姿を変えるバック、全校での青陵体操など、伝統行事といいながら、今とは異なることがたくさんあります。しかし、私は今と昔の違いを感じながらも、どちらにも共通する点を見ることができました。それは、生徒たちの青陵祭へのひたむきさです。精一杯競技し、応援する生徒の表情は今も昔も変わりません。伝統とは、方法や形を変えながらも、そこで何かを成し遂げようと努力し、感動する人々の心が受け継がれていくこと。これが、私が完成した映画を見て感じたことです。日本全国を探しても青陵祭ほど盛り上がる高校行事はいくつもないでしょう。生徒はそこで大きなことを学んで卒業していきます。

これからも先輩から受け継いだ「心」を大切に育み、青山の悠久たる歴史の新たな礎となるよう、生徒一同努力し、そして、母校新潟高校にふさわしい自身の道を築いていくことを決意し、御礼のことばといたします。

平成十三年十月二十日
新潟県立新潟高等学校生徒会長
中村　峻

新潟高等校校舎竣工・百十周年記念事業

会計収支報告書

収入の部　　平成13年12月12日現在

項目	金額（円）	備考
寄付金（同窓会・全）	22,813,110	2,845名
寄付金（同窓会・通）	510,500	347名
寄付金（保護者）	6,440,000	1,157名
寄付金（職員）	690,000	100名
特別寄付	250,000	2件
預金利子	4,411	
祝賀会会費	1,901,110	
祝賀会来賓祝儀	377,000	
計	32,986,131	

支出の部

項目	金額（円）	備考
記念事業費（施設設備）	17,602,000	式幕、柔道畳等
記念事業費（植栽整備）	1,511,935	樹木移植工事等
記念事業費（記念誌・広告）	1,067,220	記念誌作成等
式典・祝賀会	4,368,003	会場設営等
講演会	1,291,258	講師謝礼等
印刷費	1,413,605	案内、封筒等
郵送費・振込手数料	2,284,405	切手、手数料等
消耗品費	245,322	事務用品等
計	29,783,748	

収入額　32,986,131円
支出額　29,783,748円
収支差引残高　3,202,383円

上記の通りであることを認めます。

平成13年12月13日

会計監査　事務局監事　藤井　泰介 ㊞
　　事務局監事　高橋　厚子 ㊞

新年のごあいさつ

総会実行委員長　福田　実（75回）

新年あけましてあめでとうございます。

昨年度より、73回の小畴弘一さんの後を受けて、総会実行委員長を仰せつかりました。委員長を引き継ぐに当たり、実行委員会の委員構成も若手は85回までと、若干ながら若返らさせてもらいました。

その上で、副委員長を76回の北村幸輝さんと、司会役も引き受けていただいた82回の駒井早苗さんの両実力者にお願いして、総会の懇親会に臨みましたが、同窓会役員の皆様、各期幹事の皆様、先生方、そして多くの会員の皆様のご出席をいただき、例年通り、盛大に開催することができました。誠にありがとうございました。

懇親会のアトラクションは、実行委員会の工夫の対象ですが、昨年は75回の富山修一さんが中心となって作成していただいた「青山ウルトラクイズ」を出題いたしました。

これは新潟高校に関するクイズで、例えば、（1）応援歌・丈夫はいつから歌われたか？（2）旧制新潟中学校校歌と新潟高校校歌の作曲者は誰か？（3）青陵祭はいつから始まったか？（4）青陵祭がクラス対抗から連合制に移行したのは何故か？（5）通信制を含む全卒業生は何人か？等の質問です。クイズも好評でしたが、同時に、久しぶりに会う同期生や先輩後輩の熱気や感動に押されてしまった感もありました。それだけ、総会の懇親会が盛り上がったと言えるかも知れません。

総会実行委員長は一年留年が通例だそうで、同窓会の皆様、今年も多数のご参加をよろしくお願いいたします。

ちなみに、前述のウルトラクイズの答えは、（1）丈夫の元は東京高等師範学校の宣揚歌で、大正十二年の甲信越野球大会で歌われたのが記録上の最古。（2）共に、十二回卒の大和田愛羅（アイラ）氏の作曲による。（3）青陵祭の起源は昭和二十五年の記念運動会で、生徒会が文化祭の要素を盛り込んで、「青陵祭」としたのが昭和三十三年。（4）昭和二十五年から女子生徒が入学してきた

が、ヤモメのクラスが出来たため、昭和二十七年に「下級生の女子生徒と口をきくため」にクラス対抗から連合制に移行した。(5)百十年の歴史の中で卒業生は三二、〇〇〇人を越えた・・・です。

同窓会総会報告

夏も間近な七月十三日（金）例年通り、いつもの会場ホテル新潟で総会が開催されました。夏の宵のせいかまだ会場には空席も目立つ午後六時に、議事が始まり、決算、予算の承認。役員人事については、かねて健康上の理由で辞意を申し出られていた厚地副会長の辞任を承認、後任に福田　実（75回）氏を選任。副幹事長団に小畴弘一氏（73回）と瀬野正英氏（77回・校内幹事）を追加。その他は百十周年もあり、全員留任ということで、総会は終了。

引き続いて、今年度から総会実行委員長を務める福田実氏（75回）以下若手のリードで懇親会がスタート。この頃には広い会場もすっかり同窓で埋まり、いつもながらの楽しい懇親会が始まりました。上村会長、宮沢校長からそれぞれ、百十周年寄付に対する同窓各位への感謝や、新築された学校内外の様子などが披露されました。

平成十三年度東京青山同窓会総会報告

「創立百十周年記念総会」

～懐かしの映像とともに想い出を語る～

星野　紹英（84回）

“一一〇”といえばご存知警察の「ひゃくトー番」。ほんの一～二秒でダイヤルできる。しかし今年母校新潟高校（旧制新潟中学）が迎えた百十周年は、親・子・孫、そのまた子・孫に及ぼうかというとてつもなく長い長い年月である。今年の東京青山同窓総会では、その長い歴史を振り返る特別企画が催された。題して～映像と共に『想い出を語る』～。

〈挨拶に立った教頭先生の顔〉

平成十三年十一月十六日、ここ数年恒例となっているニューオータニで約百名の参加者を得て東京青山同窓総会は行われた。新潟からご来賓の上村会長に続いて挨拶に立った教頭先生の顔を見てアレッ。ナント私の現役時代の体育科教官和田先生！いや～驚きました。しかししかしこの日はもっと大きなそして沢山の楽しみが待ち受けている。

いよいよメインイベント～映像と共に『想い出を語る』～。島津孝君（84回）、北澤浩一君（85回）、小橋川嘉樹君（107回）らが中心になって、仕事そっちのけで集めそして編集したCG画像に、各世代を代表するパネラーが語る現役時代の想い出を重ねるトークショー。進行役の小林元雄先輩（61回）が冒頭、新潟日報が組んだ百十周年特集を引用して「開校当時の敷地総価格は約四九〇円」と紹介し、特別企画はスタート。

〈セピア色、カーキ色〉

最初のCG画像は「中」の文字を象った旧制新潟中学の校章。トップパネリストは戦前派代表・富所強哉大先輩（46回）。昭和九年入学という時代らしく、白山神社に戦勝祈願、砂浜での軍事教練、勤労奉仕の野外清掃といった画面が次々現れる。映像はもちろんセピア色、登場人物はカーキ色。

〈蹴球団結成〉

二番手は、戦中派代表・花井進（59回）先輩。創設にかかわったという蹴球団（＝サッカー部）の草創期の話題を中心に熱っぽく青春を語り、あっという間に時間が過ぎる。いや～何といっても印象的だったのが、校庭に芋畑があったということ。食糧難だったんですネ。最後は花井先輩の仮装したドレス姿で締めくくる。

〈進駐軍の消防車〉

三番手は、女子生徒三期目で校舎焼失を体験した中川純子（64回）さん。昭和二十九年四月新学期直前に校舎は焼け、翌年の一月に新校舎が完成したという。火事は「進駐軍の消防車」が来て漸く鎮火したというが、今改めて考えると火事はサンフランシスコ講和条約の後のはず。「進駐軍が残していった消防車」という意味なのだろう。スクリーンには当時の運動会に登場したという馬も映し出される。

〈陛下ご来校〉

四番手は、新潟国体・新潟地震（ともに昭和三十九年）を経験した池一先輩（74回）。昭和三十八年にレスリング部が全国大会で優勝したこともあってか、新潟国体では母校体育館がレスリング会場に。当時の天皇陛下もご来校。また生徒会長として関わった「青陵問題」（現在の青陵高校が女子工芸から校名を変える際の反対運動）や軽音楽バンド「ジョリーチャップス」などの話題も。そして地震直後には、実際とは反対に「万代橋は落ちたが昭和橋は大丈夫」と先生から言われたとの裏話も暴露。

〈スト権スト〉

ラスト五番手は、さらに十年下で私と同期の保科倫子（84回）さん。サークル活動に活発に参加した彼女は、放送部・こどもの会・バドミントン・ギター部、と話題も盛り沢山。三日間完全ブチ抜いた旧国鉄の「スト権スト」、その時信濃川鉄橋上で撮ったという貴重な記念写真も登場。

まだまだ聞き足りない思いを感じつつ、予定時間を大幅にオーバーしてイベントは終了。余韻醒めやらぬ中、引き続き懇親会が行われ、そして散会。ある人は二次会、またある人は自

宅に直行。約百人の出席者はそれぞれの思いを胸に会場を後にした…。

東京青山同窓会事務局より

この度のトークイベントの映像資料（CD）―一〇〇〇円、あるいはライブ記録ビデオ―二〇〇〇円をご希望の方は、ご希望品、お名前、送付先住所、電話番号などお書きの上、FAXで事務局までお申し込み下さい。FAX.〇三-三四一三-一六九二―日下部まで。

水の王者 村長さんに

―平田大六氏（60回）関川村長に当選―

去る十一月二十五日、岩船郡関川村村長選挙で、本校60回生の平田大六氏（太洋酒造株式会社会長・社長、本会報「ハイテイーン水泳」連載中）が僅差で対抗候補を破り当選を果たした。当選に当たって、「皆さんの支持と自分の公約を基に、新しい感覚、発想、視点で、新しい風を吹かせて良い村をつくるために努力します」と抱負を語った。

新潟商工会議所 会頭・副会頭を青山独占

戸松　秀雄（67回）

県内産業界をリードする、新潟商工会議所第十九代会頭に、上原明氏（62回）が就任、四人の副会頭もわが同窓生が占めた、上原会頭はインタビューに次のように語った。

―厳しい状況の中で会頭就任をお受けになったのは―

今回、初めて会頭選考委員会の審議を経て選ばれました。その経緯を重く受けとめたことと、内外共に問題山積の中ですが、生粋の新潟もんとして会議所活動を通じて地域に貢献出来ればと考えました。

―会頭・副会頭共にわが同窓になりましたが―

結果としてそういうことになりましたね。年令的なバランスも取れていますし、同窓ということを力強く思っています。

―同窓会に期待するものは―

同窓会総会にはほとんど出席をしていますし、会報も楽しみにしています。百十周年記念の募金もあえて外部に求めず、同窓会とPTAだけで集めたことは青山の見識であり、すばらしいことだと思っています。団結力のある同窓の方々から、商工会議所の活動にも大いに力を貸していただきたいと願っています。

―高校時代の思い出は―

個性豊かな先生や友人に囲まれ、高校生活をエンジョイしていました。最大のものは良き友に恵まれたことですね。数少なかったのですが、女子の同級生がキラキラと輝いていたことが思い出されます。

―現役へのメッセージを―

学業に励むことは当然のことですが、人間的に幅のある、社会に通用する常識を持ってほしいですね。ナンバーワンスクールとして自信と誇りを持って学び、二十一世紀に羽ばたいてほしい。

会頭・副会頭の略歴は次の通り。（副会頭は卒業年度順）

会頭・上原　明氏（62回）
慶応大・経卒
新潟日産自動車（株）社長

副会頭・橋本　誠氏（66回）
早稲田大・法卒
大川トランスティル（株）社長

副会頭・北村泰作氏（68回）
早稲田大・理工卒
（株）北村製作所社長

副会頭・敦井榮一氏（69回）
慶応大・商卒
北陸ガス（株）社長

副会頭・金子健三氏（70回）
早稲田大・政経卒
（株）第四銀行常務取締役

金子副会頭　橋本副会頭　上原会頭　敦井副会頭　北村副会頭

（写真は新潟商工会議所提供）

上原新会頭を支援しよう

監事　早福　卓（55回）

38回の等々力英男会頭から久し振りに青山同窓会員から会議所の会頭が誕生した。

昭和四十年代に入ってからの等々力さんの時代なら手放しで「おめでとうございます」と御祝いの言葉は使はれた。

今回の様に、世界中が同時不況なのに九月のテロ事件が経済の混迷を更に深刻にした。この時期に会議所の会頭を引き受けさせられた63回の上原明氏には、「御苦労さまです。」と云う以外の言葉がない。昔は「名誉職」だったかも知れないが当節は変って来た。

青山同窓会の副会長になられた等々力さんに、不躾けに会議所の台所事情を尋ねた事がありました。会頭の交際費は全部（株）新潟トヨタ持ち。出張旅費は距離も日数にも関係なく一回4千円で持ち切り制だった。（株）新潟トヨタの年間の負担は数千万円だと聞かされた。

中田会頭の時代は、ソロソロ不況の方向にあって古参の会員が去って行くのに新規の会員が増えない時代になっていた。中田会頭は新潟空港のターミナル新築などを手掛けて国際空港らしくして呉れた。老朽化した商工会館の改築を巡って、万代島移転か株取引所の跡地かで難渋された。（株）新潟冷蔵が経営が好況だったので会頭職の活動は支えられていたのではと思う。中田会頭の死去で筆頭副会頭の地位にあった高橋氏は否応なく会頭職を押しつけられたと見ていた。県立三条中学卒で臨港コーポの重役をしていたが、この時は既に社長を退き会長職も辞任して代表権の無い相談役になっていたので、私は会頭職としての交際費では大変な苦労をしたと思う。上原会頭は（株）日産自動車のオーナーだから経理上の不安はしなくても良い条件下にはあると思う。会頭に就任した直后に、新潟市を代表する新潟鉄工所が民事再生と云う事態になった。

不況になっても暦は遠慮無く師走になり、浮き世の義理で忘年会の交き合いが始まった。滅多に足を運ばない古町十字路を歩いていると同窓生に出会う。

財界人の後輩から「上原会

頭を応援してやって下さい」と声が掛かる。俺は会議所の会員でないから、お前達こそ頑張って応援してやれと云ったら、青山同窓会報を利用して広く同窓会員に応援を呼び掛けて呉れと云う事になり、立場も弁えずに出しゃばりました。会議所会員になる条件を具備している同窓会員は張り切って会員になって下さい。副会頭には66回の橋本誠氏、68回の北村泰作氏、69回の敦井栄一氏、70回の金子健三氏とオール青陵健児体制です。私は中田会頭時代に葦原同窓会員からも副会頭を選んで会員増加に結びつけを提言した事もありましたが何故か実現しませんでした。

十年前の百周年記念の年に上原明氏はPTA会長として鈴木正二実行委員長を補佐して活躍して戴きました。同窓会を愛する上原会頭以下の青山軍団の副会頭陣に皆んなで支援をしようではありませんか。頼みます。

新世紀の同期会…
43回同期会報告

鍵冨　馨（43回）

我々第四十三回昭和十一年卒業生クラス会が東京勢のメッセージ「第二十一世紀迄生きて、元気で一緒に酒を呑もう」を守り、卒業以来の再会者を含め、六月十二日ホテルイタリア軒で総勢二十五名（夫人同伴三組）元気で集合、健康を祝し、大変盛り上りました。そして怪気炎で「こゝまで生きたのだから、五年后の米寿まで生きよう」と再会を約しました。

翌日学校を訪問、山田栄先生の案内で、最初に宮沢校長に挨拶、校長室に飾られた我々同期の鋳金作家では国宝的な存在である、市橋敏雄氏の寄贈の作品を見た后、新築された立派な運動諸施設を見学、「さすがは、県高我等の母校」と感銘を受けました。

最后に我等が母校の更なる繁栄を祈る次第です。

平成十三年度48期回例会
卒業60年記念同期会

代表幹事　五十嵐　皓太（48回）

表記の例会は平成十三年十月二十日（土）十二時三十分から、新潟市内「羅言」において開催された。今回の出席者は二十七名、昨年より二名増えたのは、これまで長年夜の例会であったが、今年から昼の例会に変更したためかもしれない。いづれにしてもよく集まって貰ったと本当に嬉しかった。その中で東京の小林亥一君、横浜の小池清泰君と本間五夫君の三名は、毎年遠路わざわざ出席してくれ、誠に有り難く感謝に堪えない。司会は南緑八郎君、開会の挨拶に始まり、続いて五十嵐代表幹事から経過報告があった。その中で誠に残念なことは、この一年間で死亡された同期生が七名というこれまでにない多数に及んだ悲しい報告がなされ、一同愕然とした。この七名は山口素夫、近藤源資、坂井元、田村謙二、林俊太郎、佐々木常、櫛純一の各氏である。そしてこの人たちを含めこれまでに亡くなられた物故者に対し謹んで黙祷を捧げた。引き続きたまたまこの日午前九時から、県立新潟高校の校舎竣工及び創立百十周年記念式典が同校において開催され、五十嵐代表幹事もその席に参列したため、その式典の模様も報告された。次に大滝一男君が会計報告を行い、その後全員の記念撮影があり楽しい懇親会に移った。まず小川清常君の元気のよい発声で乾杯。久しぶりの再会で一同喜びの声を上げて懇談。頃合をみて全員が近況報告を発表、なごやかな笑い声が広がる。やがて限られた終わりの時間も近づき、最後に蒲原宏君が閉会の挨拶をかねて音頭をとり、全員大きな声で万歳三唱して閉会した。そしてお互いに来年の例会にも元気で会おうと約して散会した。

尚今回の例会の中で五十嵐代表幹事から「我々は昭和十六年の卒業で今年がちょうど卒業六十年に当たる。よって卒業六十周年を記念してなにか残るものを学校へ寄贈したらどうか」と提案したところ、全員の賛同を得、寄贈品の選択等については代表幹事に一任された。よって幹事会で協議し学校側にも相談して決定したいが、現在のところ記念樹の贈呈を計画し、平成十四年春に植樹したいと考えている。

春爛漫
箱根・伊豆方面二泊三日の旅

高木　研三（63回）

今回の旅のハイライトは何と言っても熱海の保養所「トラビュー」。材料を工夫した料理はおいしいし、海と熱海の街を一望にする部屋は言うことなし。温泉もベリグー。「またここに泊まりたいなぁ～」が一同の一致した感想。以下は旅の顛末記。

旅は東急田園都市線の長津田駅前から始まりました。平成十三年四月二十一日（土）午前九時五十分電車で到着した穴澤祐哉、相墨直彦、永松良久、長谷川潤治の各君は、駅前で待機していた峰松忠浩君と高木研三の二台の乗用車に分乗しました。

向かったのは今年一月に入居したばかりの青葉区あかね台にある峰松君の真新しい新居。玄関ホール部分が二階まで吹き抜けになり、その周囲をまわるようにして階段が取り付けられている新邸を見せてもらいました。一同ウォークイン式の広いクローゼットには感心の声しきり。赤い色の新芽が芽吹き始めたベニアカメモチがめぐらされ、ラベンダーのブルーの花が風にゆれている庭は春の息吹がいっぱいでした。

横浜町田インターチェンジから東名高速道路に入り、小田原厚木道路で小田原に近づくころからどんより曇った空があやしくなり、雨のなかを箱根の宮城野に到着。昼食に焼き肉料理店“みょうじん”で焼き肉を食して元気百倍。

ヨーロッパのガラスを集め

た仙石原の“箱根ガラスの森美術館”で、この日から始まったばかりの「箱根大ヴェネチアングラス展」を鑑賞しました。

この美術展、今年がイタリア年であることから、この美術館をはじめヴェネチア市とヴェネチアングラスの産地のムラノ島にあるヴェネチア　ムラノ・ガラス美術館などが共同で開催した企画展で、会場には「ヴェネチア共和国が最も輝いていた十五～十八世紀にかけての時期に作られた、ガラスに絵付けをした絵皿や、繊細華麗なレースグラスの数々、ワイン用の酒器などが展示されています。じっくり見れば見るほどに、手間ひま惜しまず精緻に作られた品々に圧倒されてしまいました。

雨の美術館はまたおもむきのあるもの。中庭の池では誕生したばかりのマガモの赤ちゃんが元気に泳ぎまわり、イタリアンレストラン呼び物のカンツォーネも好評。遂にはカンツォーネの男性歌手と並んでの記念撮影に納まって・・・。グラーチェ！

時間に余裕があったので金太郎を祀った仙石原の“公時神社”に足をのばして参拝。境内にあった金太郎のトレードマークの鉄製の大きな“まさかり”は平成の御世になってからのものでした。

初日は仙石原の「住友仙石山寮」に宿泊。温泉に入り、夕食後は部屋に戻って酒を酌み交わしながら「日本経済の今後の推移予測」といった大所高所からの激論が、夜が更けるまで続けられました。

二日目は午前五時半、いきなり大捜索で始まりました。紛失物は某氏の重要品。捜索の結果無事に見つかり持ち主に。同室の二人はほっとひと息。エッ！品物は何かですって？それはイ・レ・バ。

朝食のあと行動開始。二台の車に分乗した一行はまず“箱根湿生花園”へ。夜来の雨があがった園内はみずみずしい緑に包まれており、早春の売りものミズバショウは盛りを過ぎてしまったものの、カタクリや高山植物のコマクサが可憐な花をつけ、ススキ野原から湧き出る流れを横切るキジの姿を見ることもできました。

仙石原プリンスホテルで小休憩後、芦ノ湖畔の元箱根から十国峠を経て熱海へ。市街地へくだる途中の、熱海峠に程近い“姫の沢公園”は山の斜面を利用して作られた市民憩いの場所で、ツツジが早くも咲き始めており、一同園内の散策を楽しませてもらいました。

この公園、山の稜線まで一面にツツジに覆われ、花が咲き揃ったらさぞや、と思わせる規模で、この日は日曜日ということもあって園内は家族連れなどで早くも賑っていました。

熱海駅前繁華街の中ほどにある戸隠そば屋で昼食後、和風にコーディネートされた喫茶店でコーヒーブレーク。そのあと、熱海伊豆山保養所「トラビュー」に向かいました。

この保養所、伊豆山の山頂にあり、急坂とカーブの連続で運転しているうちに目が回りそうでしたが、熱海の街なみや初島がはるかに望めて、登って来たかいがある抜群の眺望でした。

メゾネットタイプの部屋は階下の十二畳の和室が四人用、階上はツィンルームと十一畳相当の談話室があり、カラオケまで用意されていて至れり尽くせり。タオルを手に飛び込んだ大浴場には露天風呂と、普通のホットサウナかミストサウナがあり、更にカラオケルームにテニスコート……と、充実した設備は、保養所の範疇を超えるものでした。

正面入口や渡り廊下の部分などには、鎌倉在住でフランスのアンドレ・チボー賞を受賞した岩崎勇人さんが作った、ガラスをエッチングしたあとに彩色をほどこした大変手間のかかった見事なガラスアートが設置されていました。「海色の街」という、廊下にある高さ1.5m、長さ10m程もある大作は、魚が泳ぎ回る海中の様子が中央の部分に描かれ、そのまわりでは花が咲き乱れる浜辺に動物が躍動し、漁り火や三日月、流れ星なども遠景に描かれています。

特筆ものは工夫をこらした料理で、夕食に出された、とり肉やうなぎ、野菜などを春巻のかわで包んで蒸したうえ、ニンジン素材のソースで仕上げた何ともニクイ料理や、沼津沖で獲れたアナゴの稚魚を醤油で食べるシンプルな料理、朝食のマグロを納豆でからげた「まぐろ納豆」など、料理人の心意気を感じさせる素材を上手に活かした料理でした。

この日は自民党総裁選出の予備選で小泉候補圧勝の勢いを見せた日だったため、夕食後は、前日とは様変わりして、最新政治情勢の分析で話が盛り上がりました。後半はカラオケに移行。某君が訓練されたのどを披露して独壇場の活躍。当グループに名エンタティナーの誕生となりました。

三日目。保養所をあとにした一行は、まず縁結びの神社として知られる麓の“伊豆山神社”に立ち寄ったあと、真鶴町へと北上して、真鶴半島にある“中川一政美術館”で絵画等を鑑賞。ここは平成元年に開館した町営の美術館で、五つの展示室にはこの町にアトリエをかまえて制作を続けた中川の作品百点程が展示されています。

この美術館の観どころは、箱根の駒ケ岳を十年の時を隔てて大きなキャンバスいっぱいに描いたどれも「駒ケ岳」という三枚の大作で、見較べているうちに作風の変化や、対象のとらえ方の推移などが見えてきて、興味の尽きない展示でした。

その後訪れた“真鶴半島”は長さ九km、岬から五百mにわたって岩礁が続き、先端に三つの岩があります。地形が、両翼をひろげ首を伸ばして飛ぶ鶴の姿に似ていることから名付けられた半島で、樹齢三百年を超えるクスやスダジイなど亜熱帯植物の原生林が半島を覆い尽くしています。

半島先端の公園にある歌碑の「わが立てる　真鶴崎が二つにす　相模の海と　伊豆のしら波」というたは、与謝野晶子が昭和六年十二月にこの地に立ち寄ったときに詠んだものでした。

今回の旅の締めくくりは真鶴駅前のすし処「鶴鮨」での会食。昼食に各人好みの寿司をつまんで大団円となりました。

青山69回 四十周年記念同窓会

大森　ゆかり（64回）

十月二十七日、卒業四十周年記念大会が湯沢温泉の“ホテル双葉”で開催されました。大会前にゴルフ組は湯沢パークゴルフ場でプレーをしました。当日は前日と打って変わって十月末には珍しい暖かさで紅葉の真っ只中、景色は最高でしたが山岳コースの難しさも最高でした。五年前にも同じコースでプレーしたはずなのに何で今年は登りがきついのかなどと言いながら、皆自然にクラブが杖に変わっていました。ちなみに優勝は西山君でした。夜は東京、新潟、遠い所では大分からも集まり総勢五十八名（女十男四十八）になりました。顔を合わせた瞬間には、この人誰？と思うような方も何人かいましたがすぐ昔の顔を思いだし、あっという間に四十年前に戻った感じでした。皆年を重ねて男子は威厳に満ち体格もひとまわり太くなりそれなりに良い顔になっていました。女子はますます貫禄が付きそれなりに綺麗になって、「あんな綺麗な人いたっけ」と言う言葉も出るほどでした。ただ男子の中にはすっかりおぐしが変わってしまった方もあり集合写真の中では先生と生徒の区別がつかないくらいでした。渡辺勉先生と横山先生がご出席して下さいましたがお二人共お元気で大変嬉しく思います。一次会、二次会と楽しい時が過ぎてゆき、話題はやりは定年の話とか子どもの結婚、孫の話、老後の話などでした。今年は五十代最後（五十九歳）の年ということで大事な人生の一区切りにきているのです。ワイワイガヤガヤ話がつきませんでしたが、最後恒例の校歌と応援歌でお開きとなりました。翌朝、女子は食後集まって又延々とおしゃべりが続きましたが男子は何故か早々に帰っていきました。お仕事でしょうか？それとも日頃の罪ほろぼしで家庭サービスでしょうか？なにはともあれ、来年は還暦。健康に気を付けて次回の同期会にみんな元気に顔を合わせることができますことを祈念して、ご報告を終わりにします。

四六回報告記

重ねての祝賀会 79回生意気上がる

吉田　至夫（79回）

平成十三年五月十七日。会社の朝礼が終わってまもなく，江花和郎君から電話があった。「新聞を見たか。」彼は急である。「すぐＦＡＸしてやる。後は君に任せる。」

毎日新聞朝刊であった。わが同期生、新津市で園芸業を営んでいる（株）日園社長、片岡（旧姓豊岡）道夫君の記事。「新潟の雪割草で、英国フラワー賞金賞。日本人初の快挙」とあった。詳細は本人に譲る。我々は祝賀会である。無関係にゴルフまでやる。ちなみに賞品は花だったが雪割草ではなく、南アフリカ原産のランであった。

出席者（以下、敬称略）。石井智弘、江花、岡田均、本人、木村泰博、小泉仲之、佐々木隆輔、佐藤久一、鈴木正昭、横尾尚巳、80回櫛谷文隆、81回長北敏弥、友人の風間東治、幹事の吉田である。実は、片岡、横尾とも卒業アルバムには載っていない。最後に触れる。

続くものである。十一月下旬にビッグニュースが飛び込んだ。江花君の連合新潟・事務局長就任の報である。祝賀会となると集まりが良い。四六会の常連に加え、由緒あるサンパチ会の面々もかけつけてくれた。白井行雄、曽根隆夫、本間善夫、本間義康の諸氏である。師走の町に全員、大いに気を吐いた。四六回とは単純で、79回つまり昭和四十六年卒業生の意味。サンパチ会は違う。伝説の教師、故斎藤三郎先生の「サン」と担任クラスの「ハチ」である。平成十三年出版の「思い出の記“斎藤三郎覚え書”」の桑原直樹君の記が詳しい。

時代には匂いがある。たとえば、斎藤三郎さんは古き良き旧制中学、高校の匂いを強烈に持った。持ち続け、美化し、自らの人生に昇華した。それが、我々に伝説を創った。我々にも時代があった。その匂いとともに、片岡、横尾諸氏は間違いなく我々の同期生となる。

◇　◇　◇　◇　◇

片岡です。それが物のはずみであれ、人は途方もないことに挑戦せざるを得ない時がある。苦労を重ねた末、幸いにも栄冠を手にすることができれば報われる。しかしその逆に、挑んで失敗した場合でも、そこから学ぶことも少なくないものだ。

二〇〇〇年の二月十五・十六日にロンドンで開かれた英国王立園芸協会（ＲＨＳ）主催のロンドン・フラワーショーで、私たちの出展した雪割草が栄誉あるゴールドメダルを受賞した。

この出展事業は、新津市内の私を含む三人の園芸関係者が、九八年から取り組んできたものだった。展示に用いた三十九鉢の雪割草はすべて新潟産のオオミスミソウで、その日本の伝統的なディスプレイとも相まって、高い評価を得たようだ。

このゴールドメダル受賞は、百年近い同フラワーショーの歴史で日本人生産者としては初だったこと、タイムズが大きく取り上げてくれたことなど、意義深いものとなった。

しかしここに至る間、次から次へと出てくる問題・課題。異国の人々との交渉、それに従って増える手間や出費。正直言って、出展断念の思いが三人の頭をかすめたこともあった。けれども結局、「成し遂げなかっ

た悔いよりも、やり遂げた達成感を選ぼう」と、出展までこぎ着けた。

また、多くの方々から頂いた御支援も私たちを支ええくれた。感謝申し上げる次第である。

二〇〇〇年という大きな節目の年に、棺おけの中まで持っていける良い思い出をRHSから頂戴したと、今振り返っています。

片岡　道夫（79回付）

新プール完成記念
青山水友会総会の記

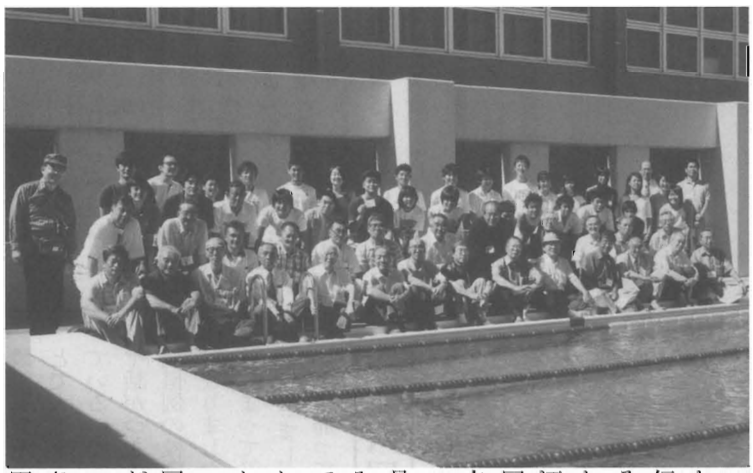
青山水友会事務局　横瀬　功（66回）

脱水症予防に、水のボトルを大量に買い込んで準備した暑い日だった。

新しく完成した"平成のプール"に、平成十三年八月十八日、現役の水泳部生徒と卒業生の青山水友会会員が全国から集まった。総勢六十名余り。

開始前、新校舎を初めて訪れる年配の先輩たちを、数人ずつ、水泳部生徒が案内して校内を一巡。和気あいあいの交歓の始まりとなった。

プール・サイドでは、練習用に先輩が贈呈した大型タイマーを眺め見てから、待望の新プールで交歓水泳大会だ。二十五メートルながら八コースもあり、浄化装置も自動で快適、澄み切った水が常時確保されている。男女トイレも付属、立派な施設である。駐車場の二階にあるため、正面入口から入らないと、外から直接プールには行けない。望むことは、可能な限り早く屋根をつけて、冬場は温水化して欲しい。



樫木基さん（48回）が、昔懐かしい赤褌を参加者全員に寄贈してくださった。若い人には褌の締め方から指導。和やかな笑いが起きる。そして、たちまち往年の勇姿が、プール・サイドに続々と再現した。今では、大会に着用は認められないが、かつてはこれが水泳のユニフォームであった。

往時を回想して目を細めるもの、颯爽と水しぶきをあげて飛び込むもの、いつもながらの夏のプール風景となった。

昔盛んに歌われた"水泳部歌"を伝授し部員のいっそうの結束を促したのは、幹事長の江口良助さん（61回）。応援歌「丈夫」の替え歌だ。

「紅の褌締めて　月の夜に西瓜を盗み　みっつけらって　褌取られ　丸出し　丸出し　丸出し！」と歌唱指導。

爆笑に続いて一同大声の斉唱。心が一つになった。

会長の大黒善弥さん（50回）と平田大六さん（60回）が、赤褌姿のままプールサイドで談笑している。曾ての子弟。平田さんは、十年以上も前から同窓会報に「ハイティーン水泳」を連続執筆しておられるので、どなたもお馴染みであろう。県水泳界では、新潟高校の生んだ麒麟児とアナウンスされた人である。長い間、県記録を保持しておられた。ちなみに、この後、十一月岩船郡関川村の村長に見事当選された。

褌姿の付き合いでは、みなが童顔に戻る。それが、青山水友会の楽しさ。

夕方の宴会も和やかに歓声がいつまでも続いた。

総会の準備と後片付けに、現役生徒と中戸、渡邉、お二人の顧問の先生方が、暑い中汗を流してくださった。

多くの先輩諸氏は、感謝をもってこの平成の新プールが、後輩の青春の軌跡に深い襞を刻んで欲しいと願って、次回の再会を誓った。

青山体友会の集い

中川　弘（58回）

肉体の成長は、二十才をピークとする、その十三才より十八才迄の成長期を体操部としての生活をした昔のOBが「ヤアヤア」と、今年も、なつかしいお顔を十月二十一日に合わせる。第十五回青山体友会である。前日は母校百十周年記念式典があり、百十年と云えば長くもあり、又短いものかも知れない。酒が入ると、瞬時に頭は昔のことによみがえる。新しい事は憶えられなくても昔の事はどうして、こんなに、なつかしく想い出されるのだろうか。大先輩の三十八回卒の近藤圓氏は今年八十九才である。ベルリンオリンピックの候補者で、新潟県に始めて、低鉄棒を紹介した話を、みんな感心してきいていた。体操は、体は勿論の事、心の面でも、その後の人生の生き方など、各自それぞれに多くの事を教えられる。母校には、今体操部はないのが、残念だが青山体友会は、伝統の体操部をしっかりと受け継いでいる。一人の会話より「そうそう」「それはこうですよ」と次から次へと時の経つのを忘れる幸福な一時である。青山体友会の一員としての誇りと満足感は、ほのぼのとした快感を与える。体操をとおして先輩後輩のきずなは、しっかりと結ばれている。来年も再来年も、この会の継続を祈り、解散する。

当日の出席者　近藤圓（38回）外山芳夫（49回）五十嵐喜八郎（50回）土田卯八郎（51回）斉藤兌（52回）渋木登（55回）青山昭郎（55回）中川弘（58回）白根忠（59回）中野文郎（59回）川上忠男（59回）相川義信（59回）外山照夫（60回）横山明裕（82回）

グランド改修工事完工に寄せて

青山野球倶楽部会長　宮川　幸司（58回）

新年おめでとうございます。昨年はテロ事件をはじめ騒然とした一年でした。しかし、師走には、敬宮内親王のご誕生という慶事もあり、今年は少し良い年になるのではと思います。

野球部に関しましては、年末に校舎改築に伴うグランド改修工事が完工し、使える広さも今まで以上のものとなりました。春になると六年間に渡ったジプシー練習から解放され、腰を据えて練習をすることができる様になります。この間、不便不利な練習環境のなか頑張ってきた監督、部長、選手諸君に敬意を表したいと思います。又、倶楽部会員の皆様には、移動手段の車の寄贈、燃料の支給、練習用具の運搬、遠征費用の援助など物心両面のご支援をいただいてまいりましたことに、改めてお礼を申し上げます。グランド改修工事完工に合わせて、当倶楽部としては、三年前より会員の皆様にご協力をお願いし、会費の他に別途積立をいたしてまいりました。

今春、それを原資とし、本年度会費を加え、投球練習場の築造、簡易照明設備の設置をいたすことにしております。又、当倶楽部の力だけでは足りない、バッティングケージの購入につきましては青山同窓会より、ご援助いただくことになりました。ここに上村同窓会長をはじめ同窓会員の皆様、百十周年記念事業実行委員会の皆様、又宮沢校長先生、教職員の皆様に改めてお礼申し上げます。

これら皆様のご援助により、いままではできなかった、相手校をお招きしての練習試合も当校グランドで行うことができるようになり、現役選手諸君もたいへん喜んでいます。（三月二十四日こけら落としの意味で新潟商業と試合を行う予定です。）

このように環境は整ったのですから、現役選手諸君には、より一層練習に励み皆の夢である甲子園大会出場を現実のものとしていただきたいと切に念じます。

最後になりましたが、同窓会員皆様の本年が良い年になりますよう祈念いたしつつお礼とさせていただきます。

中学寄宿舎の想い出

近藤　圓（38回）

先日、大正の中頃から昭和の始めにかけての県立新潟高等女学校（現・県立新潟中央高校）の寄宿舎生活事情を書いた手記を読んだ。舎生同志のロマンスや先生への恋愛感情など、当時中学生であった私などの想像できないような世界が展開されていた。

私は今から七十五年前、大正から昭和にかけて旧制・県立新潟中学（現・県立新潟高校）へ入学すると同時に寄宿舎生活をさせられた。小学六年を卒業したばかりで父母の元を離れて変な集団生活へ入れられたのだから、慣れるのも大変であった。当時はバスのない時代だから、近郷の良家の生徒が入り、各学年十人くらいずつ、一年から五年生までおった。五年生といっても今の高校二年生だが、当時は、その上級生が恐ろしいほど大きな大人に思えたものである。

その上級生の格好な遊び相手、いじめ相手が新入りの一年坊主なのだから様ざまの変な遊びというか、教育（？）の対象にさせられたものである。思い出すまま二・三紹介してみよう。

試胆会　いわゆるきもだめしである。今夜試胆会をやるという夕方、そのコースを一応明るいうちに案内しておき、夜中に起こし、怪談やお化けの話を聞かせておいて一人ずつ、ばけつを持たせ、家の一軒もない暗い松林と砂浜を歩いて海の水を汲んでこさせるのである。途中上級生の幽霊がマントをかぶって出たりするものだから、逆に怖さが薄らいだ。これは海まで二〇〇ｍくらい。秋には寺の墓地を通り、五〇〇ｍほどの競馬場までで、これも墓や火葬場があり怖かった。

催眠術　新入早々一年生を一人宛呼んで、催眠術の名人と称する上級生が変な暗示を与え背中をなでたりしてかけるのだが、誰も、かからない。中にはかからないと悪いと思い、かかったふりをする者もおる。私もその一人でかかったふりをしたら名人は喜んで「お前は今犬になったぞ」私は四つんばいになって「ワンワン」と吠えたら周囲の上級生大喜び。

解剖　これはひどかった。夜眠っていると上級生がふとんをはぎ寝間着から猿股までぬがせていじられるのである。当時は机の上に必ず青と赤のインキが置いてあったものだが、その赤インキをＭに（なぜか男性のをＭ、女性のをＶと呼んでいた）塗ったりする。中には朝起きたらＭから洋服かけの釘へヒモで結ばれていた者もいた。私も朝目を覚ましたら本校の柔道場に寝かされ、ビックリして起きて便所へ行ったらＭが真っ赤になっていて驚いたことがあった。

Ｍ検　一年生を一人ずつ呼んで、数人の上級生が検査官になって猿股を取らせ、Ｍの検査と称して、発毛具合やインキン、タムシの検査（？）をする。試胆会よりはいいが、いやな遊びで、ほとんど小便小僧のように可愛らしいのだが、そんなのを見て喜び、インキンには歯みがき粉をぬってやり、タムシにはヨードチンキをぬって、痛がるとうちわであおいでくれるという何とも野蛮な検査だった。

とにかく可愛い坊っちゃんをいじめて遊ぶ風習、たちが悪い。私が今も忘れず折にふれて思い出すのは、母へ手紙を書いたら早く着くには封筒に「しきゅう」と書けと言う。その字を知らず訊いたら、赤インキで「子宮」と書けと教えてくれた。それでなくても怖いきびしい母から目の玉の飛び出るほど叱られた。今は子宮など女性の一部として誰でも気軽に口にするが、当時は禁句みたいなものであった。

私もいよいよ下級生にやる番になった四年生の時、新潟、新発田間にバスが走るようになり寄宿舎を出てしまった。そして間もなく寄宿舎も廃止になった。それから七十五年たった今では、中高校の女生徒が売春しているというから世の中も変わったものである。

（一三・一〇・一八）

ハイティーン水泳　新中・新高

平田　大六（60回）

34

60　渡辺秀英水泳部長

一九五〇年頃、私が高校二、三年の時、水泳部の部長に渡辺秀英先生を選んだ。何故？と思われるお方もあるかもしれない。最近、一九九七年十一月四日、ホテル新潟三階で、「渡辺秀英先生米寿記念。琴舟道人文墨の世界展祝賀会」が二百名の出席で盛大に催された。お招き

いただいたが私は参加できず、水泳部だった江口良助（61回）に私のメッセージを詠んでいただいた。

江口良助は、たいへん上手に読んでくれたという。その全文を以下に披露させていただいて、私たちが選んだ理由をのべたい。

『渡辺秀英先生は、教室の黒板にきれいな字で、唐の詩人であります白居易の長恨歌をお書きになられました。玄宗と楊貴妃のことです。

「漢皇、色を重んじて傾国を思う。……傾国というのはノウ、一国を傾けても良いほどのいい女ゴということだわ。わかるか、ほら、おまえ、そこから読んでみれや。読めねんか。いまオレがケイコクって云うたばかりらろ」

そこで、頭の上から渡辺先生のゲンコツがおろされます。

これが、渡辺先生の「暴力団長」というアダ名にふさわしい、講義の一般的な風景であったわけです。

しかし、

これからお話しさせていただきますことは、水泳部であった私たちだけが知っていることであります。私たちが、泳げもしない渡辺先生を水泳部の部長に選んでお願いしたのには、それなりのわけがありました。

それは、

水泳部の部長になっていただければ、私たち水泳部の者は、渡辺先生の授業は、おお目に見ていただけるだろう、というコンタンだったからであります。

一方、先生のほうでも、水泳部長をされておおいに得るところがありました、と思っております。私は。

それを証言させていただきます。

その頃、となりの中央高校、つまり女だけの新潟中央高校にはプールがありませんでした。私たちの新潟高校へ毎日借りにきていました。毎日です。

新潟高校は、まだ男の子だけでして、女はおりません。それが、プールにだけは、女の子もいて、しかも「混浴」状態になっていたのであります。

渡辺先生は、水泳部長でしたから、合法的にそれをしっかり眺めることができたわけであります。体育の先生だってプールサイドに立つことは遠慮されておられましたのに。

しまいには、渡辺先生は、私たちよりも、女の子の名前のほうをよくおぼえられました。大会の時もついてこられて、中央高校のテントに近寄られたりします。着替えの姿を眺められて、「おう、O子さん、よう頑張ったのう」「おい、△さんや、去年よりやせたのう」と。私たちのほうにまで、きこえてくるのであります。

ある日、水泳部長になってください、と教務室でお願いしました時に、「オレがか？」といわれても、すぐにおひきうけくださいました。渡辺秀英先生は、頭の良い人でしたから、すぐに中央高校のことをお考えになられたのでしょう。私は、そう思っております。

まさに、長恨歌の「傾国」につながる意味あいを含んでおりました。』

おわかりいただいたと思う。

母校は今

まず何よりも、校舎竣工と創立百十周年の事業と行事が無事に終了したことです。

この会報に会計の最終報告が載りますが、その報告をもって暮れの十二月二十七日に最後の実行委員会を開き、「新潟高等学校校舎竣工及び創立百十周年記念事業実行委員会」を解散する運びとなっています。

平成十年十月に、プレハブ校舎校長室で実行委員会を立ち上げてから、丸四年をかけた事業でした。きびしい時節柄ながら、同窓各位からは格段のご芳志を頂き、学校の施設設備の充実を中心とした記念事業を所期の通り全うすることができました。本当にありがとうございました。改めて御礼申し上げます。

また、去る十月二十日には記念行事として、式典・講演会・祝賀会を挙行。これも同窓の方々の、あらゆる面からの献身的なご協力をいただきまして、立派に成功を収めることが出来ました。

校舎改築はグラウンド改修を中心とした最後の第三期工事が完了いたしました。天候の具合をみて、もういつでも授業に、部活練習に飛び出せる態勢が整っております。

個人的に、旧校舎取壊し前の引越し、プレハブ仮校舎での生活、旧プール跡の穴、などをこの会報に報告することから校内幹事を始めた身としては、いささかの感懐があります。

いずれにしろ、改築校舎は完成いたしました。残るは、校舎竣工に併せて記念行事を行いました百十周年が、実際はこの平成十四年にあたるわけですが、これは事業としては名簿出版を九月に残すのみとなっております。このことにつきましても、同じくこの会報にご案内が載っております。ご協力のほど、よろしくお願い致します。

第三期工事の完了につきまして、一点お知らせしておくことがあります。「青陵健児の像」の位置が変りました。

教室棟工事後、昭和四十三年建立当時の場所には地下埋設物があって設置できなくなりました。校舎に向かって左手の、以前とは対象の位置を検討したのですが全く同じ事情でした。

正門の左脇に、登校する生徒を迎える形で立つことになりました。良い位置に落ち着いたと言えると思います。お知らせが今になり、遅くなりました。お詫び致します。

69回山田（校内幹事）

『すぱしーば ロシヤン』
―自費出版―

池端 哲（60回）

小生、一九九一年から一九九五年まで、足掛け五年にわたってロシア語の勉強のためモスクワに留学しました。丁度、ペレストロイカ・グラースノスチを掲げた「ゴルバチョフ新思考外交」の真っ盛りのときで、ロシアは迷い、混沌とした状況でありました。

大変な時期のモスクワ滞在で家族や周囲が心配しましたので、何をおいてもコミュニケーションが第一と思い留学初期には1週おきに妻子宛に手紙を書き、小生のモスクワでの見聞や生きざまなどを詳しく伝えました。

昨年、これら家に残っていた手紙二十五通を読み返してみると、当時のロシア・モスクワ事情や小生の暮らし方などが詳細に書かれており、色んな意味で面白いと思い、「貴方の原稿を求めます」という出版社二社に送ってみました。両社から「協力出版」の誘いがありました、然しこれには大変な費用が掛かるので結局見送りにしました。

今年の七月、生まれ故郷・樺太へ五十四年ぶりの訪問の折に同郷の士で出版の協力をしましょうという方があり、折角これまで暖めていた題材でもあり、また、以前にこの原稿を読んで戴いた十五～六人の知人・

友人に、お世辞半分としても好評でしたので、この度、樺太訪問・追憶の手記と併載で出版することにしました。

書名・主題『すぱしーば　ロシヤン』　副題―樺太に生まれ育った少年が激動期のモスクワへ留学、“還暦の青春”を謳い、綴ったロシア見聞記―

体裁・A5版、11ポイント活字使用、写真四〇数枚入り、約一六〇～一七〇ページ

＊「あとがき」は高校、大学同期の畏友で元新潟日報社常務取締役、現新潟県社会教育委員連絡協議会、会長の尾嶋　静君に書いて戴きました。

価格

本来ならば伏してご笑覧戴くのが「すじ」でありましょうが、事情これあり、郵送料込み1冊千円、葉書、電話／FAX、Eメールなどでご注文戴ければ現品と郵便振替用紙をお送り致します。

申し込み先

住所：〒251-0057

藤沢市城南一-一-一四

池端　哲

TEL&FAX

：0466-36-3981

E-mail:ikesan@ea.ejnet.ne.jp

富所　太三郎君逝く

金井　宣夫（36回）

36回生富所太三郎君が去る十二月十三日に亡くなった。残念至極である。

彼は西蒲原郡吉田町の出身で、在学時代は市内に下宿、時に汽車通学していた。当時は今のように学区はなく、吉田、巻、水原、新津等の出身者もいた。当時新潟市の中学校は、新中、新商、高女の三校しかなく、市外からの入学生は、格別優秀の者たちであった。

彼は、温厚な性格で同期の中では珍しく一生を通じて農業に殉じたといってもいいほどである。まず新中卒業後すぐ、東京帝国大学農業学部農業実科に入学し、卒業後農林省大宮種鶏場勤務、四年後帰郷して実家の農業を継ぎ、以後農業関係の役職の主なものを上げれば次のごとくである。

吉田町農業協同組合長、新潟県農政審議会委員、西蒲原郡農業団体代表者会議議長、新潟県農業協同組合中央副会長、県生命共済農協連合会副会長、株式会社県農協電算センター監査役等々数えきれない。その間昭和六一年から一期吉田町町長を務めた。

それらの功績により、勲五等瑞宝章、県知事表彰、各種団体表彰多数を受けている。

我ら同期には珍しい人物である。

今思うと、病状が急変した前日、かっての事務の女性達を案内してお見舞いに行ったとき「みんな若かったよな」とひとりひとりの名前をいいながらほほえみを浮かべながら話をし、帰る時に握手をして「また来るよ」と言うと何時ものように「有難う」の言葉を聞きお別れしたのがお話をした最後となりましたね。長い病との戦い本当にご苦労さまでした。

青山を愛し、人を愛し、自分の哲学を持ち、わが道を歩きつつ、人に感銘を与え続けた志賀さん、あの応援歌「丈夫」の青山、青山、青山、青山の歌声を聴きながら、ゆっくりと安らかにお眠りください。

平成十四年一月九日

友人　宮地正樹

追悼

志賀さん　やすらかに

宮地　正樹（元校長）

志賀さんにはじめてお会いしたのは、新潟高校の前の校舎が建築途上、一年生はプレハブで授業をしていた昭和三十三年の春で、赴任したばかりの私をジープと団子先生の案内で学校のシンボル、グランドの「五本松」を見に行った時でしたね。この五本松の下で座禅らしきことをしていたのが志賀さんでした。「なにをしているの」と聞くと「筋肉が下がるのでこうして直している」とのことでしたね。こうした会話からスタートして今日までのお付き合いで、名前の通り志賀哲学を教えていただき、沢山の思い出を作って貰いました。有難う。

志賀さん、志賀さんのシェークスピアの名講義を、今でも楽しく懐かしい思い出として大切にしている教え子たちが大勢来ていますよ。

また、スポーツと縁遠いと思っていた志賀さんが、スキーをするの見て驚いていると「北海道育ちでそこらの人とは違うのだ」と腕前を披露して、六日町での学校スキーの指導者として全面協力頑張ってくれましたね。あの時の生徒も大勢来ていますよ。

しかし何といっても、皆が驚いたのは野球でしたよ。志賀さんらしい野球哲学・野球論理は何とか理解しても、グランドに出てノックをするとは思いもしませんでした。「志賀さんがノックするそうだ」と言うので皆で見学にいきました。最初はバットと球とに距離が有りましたよね。でも好きこそ何とやらで鋭い球のノックになりましたね。しかし最初のうちは、いつになったら球が何処に飛んでくるかと、部員は暇そうでしたよ。その志賀さんがこよなく愛した青山の野球の皆が大勢来ていますよ。

志賀さん、志賀さんは新潟高校をそして教え子たちをこよなく愛した人生でしたね。重い病の教え子を見舞う為に、しかも気を使わないように別の用できたようにして東京まで行き、そしてその様子を涙を浮かべながら私に話してくれましたよね。

またあの小林秀雄先生の話を生徒に聞かせようと、自ら足を運び「志賀さんの頼みなら」と引き受けていただきましたよね、あの時の生徒達は人生の糧として大きな感銘を受け今でも話題にしています。

あなたは文字通り、青山の青山らしい先生でしたね。

酒は飲めず、コーヒーで顔を赤くする志賀さんを、酒の席を含めすべての会に誘っても嫌な顔一つせず出席して、皆に溶け込み議論し談笑したときのことを決して忘れません。

百十周年記念講演会

百十周年を記念して河合・佐藤両氏による講演会が行われました。紙面の都合により。まず本号で河合氏の講演を、次号で佐藤氏の講演内容を掲載いたします。

探検と冒険
～未来への挑戦～

講師　河合雅雄先生

皆さん、おはようございます。今日は新潟高等学校の校舎竣工、それから創立110周年という大変お目出度い時を迎えられまして、本当におめでとうございます。

そこで、若い皆さん方にお話が出来ることは大変嬉しいことであります。旧制の新潟高校を出たうことで特集をしていただいて大変光栄なことです。この時の編集委員の方々、この時の２年の方は卒業のようですけどね。一年の方は今おられる。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。「河合雅雄の断片」と書いてある。「断片」というと、ちょっと格好いいのですが、そこに「カケラ」と書いてあるんですね。仮名がふってある。これはなかなか面白い見方なんだなと思いました。そしてこの雑誌拝見いたしましたけれど、やっぱり若い人たちの感性ですね。それが本当にひしひしと感じられる。やっぱり私のような歳いった者と違う、本当に素敵なキラキラした感性があるなと拝見いたしました。皆さんを前にして、とても嬉しい気持ちがしますのは、皆さんが、これから非常に多彩な可能性のある未来をもって望んでおられるということですね。私などは、もうこの先あんまりありませんから、非常に羨ましい気持ちが致します。私はちょうど20世紀を生きた人間なわけですが、皆さんは、これからの21世紀を生きて担っていく、そういう若い人達であります。未来というと、すぐやっぱり思い出す色は薔薇色と言われますね。そして、夢・希望、そういう言葉が出て参ります。未来というものは、本当にそうあればいいのですが、必ずしもどうも薔薇色ではない。そして葉はところどころくすんでいる。一部は又病んでいる。そういう薔薇がフッと思い浮かびます。残念なことですが、さきほど校長先生もおっしゃいましたが、ニューヨークの貿易ビルの大惨事があり、今アフガニスタンへの攻撃が始まっている。国際テロ活動や炭素菌の問題等いろいろ起こっておりますね。どうも21世紀の幕開けというのは、もっともっと素晴らしかった筈なのですが、どうも不気味であります。この21世紀をどうつくっていくか。これは本当に皆さんの肩に掛かっているというふうに思います。

20世紀という時代、これは一体何だったのか。いろいろな見方がありました。やはり大きなことは、大変、高度な科学技術を発達させた文明社会をつくった、そういう世紀だったと言っていいと思います。そして私たちはその文明の恩恵を受けておりますね。物は溢れるほどあります。それから飽食なんていう言葉もあるように食べ物は本当にいっぱいある。いわゆる豊かな社会というものの中に我々は生きているわけです。しかし、ちょっと振り返ってみますと、我々先進国の豊かさの陰に南北問題と言われますが、途上国のなかには、飢餓とか貧困あるいは病気、難民で苦しんでおられる方が非常にたくさんおられます。私はアフリカでの調査がずっーと長かったのですが、アフリカという国は大変な国ですね。特に私はエチオピアで長く調査をしましたが、本当に飢餓と貧困に戦っている人たち、それから子供たちと随分見て参りました。これが今の現状なんですね。

一方、地球環境問題ということが今大きく取り上げられております。これはひとくくりした言葉ですけれども、内容は非常に一つ一つが怖いことですね。オゾン層が破壊されている。それからＣＯ２の濃度も上がって地球温暖化が進んでいる。それから酸性雨が降っている。それから大変残念なことですが、大地も水も空気も随分汚染してしまった。熱帯雨林が伐採されて気候変動に大きく影響しようとしている。こういういわゆる地球環境問題というものが、我々にまっとうにふりかかっているわけです。そのなかで人類は将来破滅するかも知れない。そういう声も残念ながら聞こえます。残念なことですけれども、今のこのままの状況を放置してしまえば、本当にこの人類は破滅に向かうということも、私はあり得ると思いますね。けれども、何でも行き過ぎたら、それを取り返すのは非常に難しいけれども、今起こっている地球環境問題と言われる大変な問題も、今皆んなが力をあわせて、それを抑制する。そういうことをやれば、今なら十分に間に合うと私は思います。ですから今という時代は、人類の運命を担っている。運命を決めていく、そういう時だという感じがするんです。これには皆さん若い人たちの力、それによってしか期待するものはありません。未来が薔薇色の世界の21世紀が開けるのか、どうかというのは、あるいは又残念ながら破滅の道を歩むのか、それは今皆さんの力にかかっていると思います。地球環境問題と言うのは、皆さん、随分学校でも知識としてもっておられると思うのですが、今何が起こっているか、何も感じませんね。何が…なのか感じない。けれどもオゾン層、いわゆるオゾンホールですね。南極に出来るオゾンホールは、今までのなかで最大です。毎年どんどんどんどん広がっていく。ご存知のように紫外線というのは、三つの波長を持った紫外線があります。Ａ波、Ｂ波、Ｃ波といわれます。こういうところに落ちてきているのは大体Ａ波なんですね。我々の皮膚を黒くする。Ａ波というのは、勿論、紫外線が悪い悪いと言われますが、これは人間の生存に必要なものです。ビタミンＤを合成するとかですね、紫外線がなければ私たちは上手く生きておれません。Ａ波は大事なんですが、Ｃ波になると、これは言わば殺人光線といっていいでしょうね。本当にＣ波が落ちてくると強烈なＣ波にさらされると、ＤＮＡは破壊されます。それから免疫機能はうんと落ちてしまう。そういうことがおこりますね。これは人間だけではありません。あらゆる動物、植物みんなに大きな被害がこうむります。そういう恐ろしいＣ波はオゾン層が全部防いでくれているわけですね。勿論、見えません。オゾン層というのは、あることまでは分かるわけですが、それが今どんどん破壊されているわけですね。ご存知のようにフロンガスといわれる。ガスが一番大きな破壊の原因です。ただフロンガスだけではありません。メタンガスとか、いろんなガスが破壊をしているわけです。これを何とか止めなければならないわけですね。ですから、世界中の人によってフロンガスを20世紀には作るのを止めてしまうということで、先進国はみんなフロンガスの生産をやめました。けれども途上国の人たちは、なかなかそうはいきません。まだフロンガスの生産を続けております。それからフロンガスを日本は勿論やめていますね。やめているけれども一辺空に放ったフロンガスというのは、だいだい成層圏に達するのに10年かかるんですね。だから全部やめてしまっても、どんどんどんどん上がっている。そういうことです。ですから、地球の人全体が力をあわせないと、オゾン層の問題ひとつとっても非常に危険な淵に臨むということになります。こういうような今の現状なですが、本当に皆

さんが力を合わせて、明るい21世紀をつくられる。そのことを本当に望みたいと思います。
ただ残念な数字があるんですね。「21世紀は明るい夢がもてるだろうか」、国際的なアンケートがあります。中国の若い人たちは90パーセントが「明るい未来」と答えているわけですね。欧米の人たちもだいたい60パーセントは「明るい未来がある」と。残念ながら日本は一番そういう点で夢がないんですね。「明るい夢があるだろう」と言う人は30パーセントを切っているんですね。多くの若い人たちが21世紀に何か暗いものを感じている。そしてその結果、非常に現実享楽的と言いますかね、今さえ良ければいいんだ、今の自分さえ良ければいいんだという気風がどうも広がっている。そういう状況があります。これは私はとても残念なことだと思うんですね。

私は、途上国は勿論、いろんな外国にうろうろしているわけですが、外の国から日本を見てみますと、日本という国は本当にいい国だと思いますよ。本当にいい国だと思います。日本人、これも素晴らしい民族ですね。本当に素晴らしい民族だと思います。そして平和で、未来の希望、こういうものを紡いでいく。あるいは構築していく素晴らしい民族だと思っております。残念ながら21世紀に、もっとみんなが明るい希望と未来をもって進む、そういうことをやってもらいたいなと思うのです。今日は「探検と冒険、未来への挑戦」ということを掲げましたのは、私の皆さんへの思いがあるからです。偶然、校長室には宮沢校長先生が「人間万事チャレンジ」と書いてありますね。あれを見て別に私がしゃべる必要がないのかなと思いましたが、せっかくですから、この「チャレンジ」ということをお話したいと思います。

未来への挑戦、これは未知の世界ですね。未知の世界に挑戦していく。これは本当に若者の特権だと思います。皆さんは、その若者の多感の中にある。いわゆる青春という時代ですね。勿論、私も青春がありました。けれども残念ながら私の青春は戦争、それから私にとっては病気という二つに抑圧されて本当に灰色の青春を送ってきたわけですが、今は本当に皆さん、素晴らしい文明への恩恵の中での青春を謳歌することができるわです。今の皆さんの歳は二度と来ない。これは大事なことだと思うんですね。若い人たちは、今の自分のおかれた位置というのは良く分からないと思いますけれどね。私のように歳を言ってきますと、若い時って言うのは、どれだけ大事だったかということを、ひしひしと思います。そして失ったものは取り返せない。失った時は、もう取り返せない。ですから皆さんの今を大事にして欲しいと思います。そして未来への挑戦ということには、私は探検精神というものを持って欲しいと思うんです。

「探検と冒険」を並べてみますが、どこが違うんでしょうね。一番はっきりしているのは字を見てください。「検」という字は、片方は「木ヘン」だし、片方は「コザトヘン」でしょう。探検というのは、どういうことかと言うと未知の世界を探る。そして調べること、詳しく調べること。これが探検であります。英語ではエクスプレェイションとか、あるいはエクスプロレェーションと申します。冒険は英語でアドベンチャーですね。これは「険」というのは「危険」の「険」ですよね。危険を冒して、それを乗り越えて克服していく。これが冒険であります。危険を克服すること、それ自体が一つの目的であり、楽しみであります。これが「冒険」であります。ですから「探検」と「冒険」というのは非常に似通っているけれども、内容としては対応の違うものだといっていいと思いますね。勿論、探検と言うのは、未知の世界を切り開くことですから、当然、危険が伴います。探検には冒険というものは必然的に伴いますね。含まれていると言っていいと思います。「探検」と「冒険」と非常に違うところは、「探検」というのは極めて知的な行為であるということです。つまり、未知の世界を切り開くことに対して、冒険の方はむしろ肉体的な面での大変な試練があるわけですが、探検の場合は非常に知的な行為だと思います。未知を探っていく。その結果が新しい世界を開くことですから、それをみんなの共有物に対して、そういう普遍性をもった行為であると言っていいでしょうね。
冒険の場合は、非常に個人的な行為であります。そして喜びというものは、多くは個人的なものであると言っていいのじゃないでしょうか。

例をあげれば探検の中には、すぐに思い出すのは「ピカ探検」「南極探検」という言葉だと思いますね。「リビングストン」とか「スタンディン」とか「スピィーク」とか「バード」とか、いろんなピカ探検に挑戦した人があります。当時は暗黒大陸と言われていたアフリカですね。そしてナイル川の源流を探る。ナイル川は何処から出ているのか。いわゆる地理的探検と言われた時ですが、それによって得られた知識は、みんなの役に立っていったわけですね。リビングストンその一人の喜び、知識ではありません。冒険は、極端なことを言えば、暴走族なんていうのも一つの冒険ですよね。あるいは、10階のビルの一番端っこを歩いてみる。これも冒険ですよね。それはもうちょっと人が出来ないことです。冒険とは何かというと、一つ面白いのは、自分の可能性を追及するということ。自分の可能性をとことんまで追及する。そういう個人的な行為であるといっていいと思いますね。けれども冒険の中にも探検と大きくオーバーラップするところがあると思います。植村直己という人がありますね。残念ながら近年恐らく亡くなったのでしょうが、行方不明になりました。それまで世界の五大峰というのを単独登頂する。ヒマラヤ山を登頂する大変な人であります。それから堀江謙一さん、これは単独でヨットで世界一周を果たした人ですね。こういうスケールになると、これは単なる個人的な行為というだけじゃなくて、人間の一つの限界を示してくれる。限界を乗り越える大きな可能性を示してくれる。夢を与えてくれる。そういう要素をもちます。そういう点で非常に探検的な色彩をもっていると思います。探検ということの大事なことは、今言ったように必ず危険を伴いますね。未知のことをやるには危険が伴う。けれども出来るだけ危険を排除する。そういう周到な準備をきちっとすること。これは探検にとっては非常に大事なことです。それから明確な目的を持つと言うことですね。そしてそれを貫いていくのに、非常に強靭な精神力がいると思います。そして未知の世界へ挑戦していくということであります。

こういうふうに考えると、探検というのは「アフリカ探検」とか、「宇宙探検」だとか、そういうことだけじゃなくて、皆さん自身が今探検の途上にあるということですね。つまり、人生というものがあります。皆さん全部人生をもっている。自分自身の人生がある。恐らく平均年齢からいって、今はもう80ですが、皆さんが大きくなる頃には、人生90年くらいになるでしょう。自分の人生90年、これは全く未知の世界ですね。そういう未知の世界に今皆さんが挑戦しようという出発点にあるんだといっていいと思います。高校３年、多くの方は大学へいかれるでしょうね。大学という一つの未知の世界です。そこで自分は何をやっていいのか。何をしようというのか。そこへ出発しようというわけです。それからなかには就職される方もあるでしょう。社会と言う全く未知の世界、そして社会へ出れば一人で生きていかなければなりません。自立の道です。そして大学にしろ、就職にしろ、今までは親の保護の元にあったわけですね。親から離れて自分の力で人生を切り開い

ていく。皆さんは、そういう人生探検の門出にあるんだと私は思います。大事なことは、皆さんが各々が考えておられるでしょう。一体、自分は何をしたらいいのか。これはとても大事なことですね。そういう岐路に立っているわけですね。これはとても大きな課題です。大きく分けると日本では理系とか文系の分け方がありますね。自分は理系に向いているのだろうか、文系に向いているのだろうか。あるいは理系とか文系とか、こういう考え方は可笑しいので両方合わせた道、そういうような道もあるんじゃないだろうか。こんなことを皆さんは考えておられると思いますね。将来の進路を決定するのに、ともすれば偏差値というものが非常に大きな力を持って、大学への進路を決めてしまう。そういうことにもなりがちですね。これはやっぱりまずいことだと思うんですね。例えば、だいたい医学部というのは難しいですね。東大、京大の医学部などというと非常に人材がくるところです。「これは医者には別になりたくないけれども、自分の偏差値からいって、ここが挑戦してみたかった」なんていう人が結構入っているという話も聞いています。これはとんでもない話ですね。誰の為に医学部を受けたのか。いつでも自分自身のため、一生を託し、一生を本当に楽しんで真に打ち込めるような仕事、あるいは職業を皆さんは選んで欲しいと思います。これは簡単なようでなかなか難しいですね。私も良く聞かれます「どの道に進んだらいいでしょうか？」時々聞かれることがありますよ。私の答えは非常に簡単です。「あなたは何が好きなのですか」ということですね。だいたい物事を好き嫌いで決めたら、いかんと昔から日本では良く言われてきました。けれども私はそうではないと思うんですね。好き嫌いというのは、実はとても大事なことだと思いますね。自分の一生をやるのに義務とか義理とか、何とかすべきであるということから道を選ぶのではない。本当に好きなことを選ぶということが大事です。そして又、それが出来る世の中になったんですね。これは、とてもいい世の中ですよ。

私らの若いときは、「こうあるべきだ」「こっちの方に進むべきだ」という力が非常に強かったですよ。例えば、私らも満州事変から、いわゆるシナ事変、太平洋戦争、ずっと戦争の中にありました。ですから、「お国の為に体を投げ捨てるべきだ。そのために良く出来た奴は海軍兵学校とか陸軍士官学校に行くべきだ」とかね。何かそういう非常に強い力が働いています。それに反抗することは、とても難しいことでした。だけど今は、そんことはないですよね。

皆さんは好きな道を選べるわけですよ。けれども意外に好きな道を選べと言われると、なかなか難しいことなんですね。けれども慌てて決めることはないと思うんです。自分の一生ですから、ゆっくり自分で決めればいいと思います。

ご参考になるかわかりませんが、私自身のことを喋らせていただきますけれども、つまり、私みたいな河合雅雄という男が、これだけ、のんびりゆっくりしてきても、結構、京都大学の教授にもなったと言う一つの典型だと思うんです。私は実は学校というものは、ほとんど行ってないのです。小学校３年の時に実は小児結核になったんですね。当時は結核というのは不治の病、薬も何もありません。ですから、小学校はろくに行けなかった。けれども私は自然が大好きでした。親もそれは体が弱いし好きなこともさせてくれました。ですから、ちょっと元気な時は昆虫採取に行ったり、あるいは魚を捕ったり、あるいは小鳥を捕ってきて飼育をしたりですね、そうしながら本当に自然に埋没すると言いますかね、溺れるくらいに自然に親しんできました。それともう一つは読書ということが大きな力になったと思いますね。当時は勿論テレビはありませんし、ラジオも高嶺の花です。ですから家におったら暇ですから、本を読むということが非常に大事だったし好きでした。こういう自然と親しむことと読書。これは自分のパーソナリティの中核部を作ったなというふうに思いますね。中学の４年、５年、旧制ですから今は中学の３年ですけど、昔は中学５年まであった。４年、５年の時は、この時は割合元気になりましたね。だけど全然勉強しないで、本当に魚を捕ったり鳥を捕ったり遊びまくっていたわけです。ところが面白いですね。人間の成長というのは、いろんなものが自分の中から自然に湧いてくる。それは大事なことだと思うんです。私は今は割合文章が上手いということになっているんですよ。小・中・高の教科書に載ったりしておりますが、私が一番嫌いだったのは作文ですね。小学校の時は一番嫌いなのは作文。今でも思い出すのは小学校の５年、６年を通じて作文を提出したのは２回しかないですよ。どんなに言われても怒られても書く気がしないわけですね。だから、もうとにかく作文嫌い。ところが中学校４年ぐらいになってから何か非常に文章に興味を持つようになるんです。自分の中から湧いてくるんですね。それは恐らく何でもかんでも読書をしていたということが、だんだんだんだん醸成するといいますか、成熟していくんでしょうね。そして自分で本当に文章の勉強を一生懸命しましたよ。そうしながら受験勉強は又別ですよね。１年目はあっさり全部駄目で浪人しました。浪人しても、まだ遊んでました。ピンとこないですね。１浪して、そして受けた。いわゆる有名私大に通ったんです。けれど、あの当時の旧制高等学校に絶対行きたかったんですね。親父は「この私大はいい学校だから行ったらどうだ」なんて言いましたけれども、頼みこみました。「もう１年浪人させてくれ。そして旧制高校を受けたい」。親父は「うん」と言ってくれましたよ。その時から親父に宣言したんですね。「とにかく１年余裕をくれ」と。あの時は初めて勉強しましたよ。そしたら面白いんですよね。「へぇ、こんなに面白いもんか」と。数学でも国語でも歴史でも本当に面白いんですよね。ですから、良く勉強して２浪して幾つか受けますよね。受けたところみんな入りました。高等学校は新潟高等学校を受けたんです。これは体もまだしっかりしてなかったですから、私の兄が、その当時は新潟医大の学生だったんですよ。ですから新潟高校に入ったんです。ところが物凄い悲惨なことが起こりまして。それで私は高等学校に入ってから本当に勉強しようと思ったら、ひどい肋膜炎になって、入って２ヶ月目で、もう倒れちゃったわけです。あの時は39度以上の熱が35日続きましたね。良く生きていたと思うのですが、とにかくバターンと倒れちゃって、ちょうど戦争中です。あの当時は乃木、大東亜戦争、太平洋戦争ですね。ですから、戦争中私はずーっと病気で寝ていたんですよ。とても悔しかったですね。けれども、これが人生の不思議なところで面白いところです。私の友達は健康な者は皆んな戦争に行きました。そして大陸に行って戦死をする。私の同級生はかなり戦死をしております。私は病気であったために戦争に行かなかった。兵隊にもならなかった。だからむしろ生き残ったんですね。こういうふうに人生と言うのは何が幸いになっていくかわからない。むしろ「禍を転じて福となす」と言いますけれども、病気であったことが、むしろ私にはとても幸いだったなと思います。今にして思います。その時に、いろんなものを読みましたね。音楽を聞き、いろんな技術、絵画の勉強をしたり、教養を身につけたことが大変役にたったと思います。そして戦争が終わって新潟高等学校に復帰致します。ちょうど５年遅れたわけですね。５年遅れるというのは、ちょっと遅れ過ぎかもしれません。それが又有りがたいんですよ。人生50年だったら、５年遅れたら、やっぱり、かなり痛手ですけどね。ところがいいことに人生が80年になったでしょう。だから５年ぐらい遅れたのは全然ビクともしないんですよね、本当に。旧制新潟高校に戻りました。そうすると、新潟中学のね、あの頃は中学４年生

から受けることが出来たんですよ。４年から受けた秀才の中学生がたくさんおりましたよ。私は体が悪かったから、兄貴の所に、兄貴は竹山病院におったわけですね。私はずっーと寝てました。高等学校も籍を置いただけで、ろくに行ってないのですが、新潟中学を出た人たちは寮に入れませんから、割合、友人がたくさん出来ました。そしてその頃は、四終の秀才から陸軍から帰ってきた陸軍中尉とか海軍大尉なんていうのもおりましたよ。海軍兵学校、軍士官学校を経て又高等学校へ入ってきた、いろんな人ですね。若い４年終了の若い人から、本当に陸軍大尉までいろんな人がクラスにおった。これもなかなか今から思えば良かったですね。そういう学校がこれからも出来ていいんじゃないかと思うんですね。世の中をちゃんと知った人、あるいは生死の境を越え抜けてきた人、そういう人達が若い人たちと一緒にいるそういう学び舎は、なかなかいいんじゃないかと思います。それで旧制高等学校３年ですね。それから大学へ行きます。何をやろうか、やっぱり迷いましたよ。私は、とにかく子供の時から、物凄く動物が好きなんですね。自然が好きです。当然、動物学校へ行ったらいいと皆んな思っていたようですね。私もそう思いました。動物学校へ行ったら、多分就職はないんですよ。当時は動物学、植物学やる人は大金持ちの人とか、昔の公爵とか伯爵とか子爵、そういう貴族が行ったでしょう。そういう人達がだいたい動物学・植物学をやったのです。私のような者が行ったって、職もないしお金もないし、どうしようもない。単に好きだからと行ってもどうしょうもないと思いました。もうひとつ好きなものがありました。これは地球物理なんですね。何が好きかというと、寺田寅彦という人と、中谷宇一郎という人、皆さんご存知ですか。非常に優れた随筆を書いた人です。寺田寅彦全集とか、中谷宇一郎全集とか出ておりますから、興味のある方は是非見られたらと思います。これは文系とか理系とかそんなことは関係なしに非常に優れた名文なり随筆ですね。その二人に非常に感銘を受けた。どちらも地球物理学をやっている人達です。地球物理学をやろうと思いました。私はほんとに大体寝ていたでしょう。数学でも物理でも机に座って勉強したことないですよ。全部寝転んでこうやって、物理でも数学でも読んでおったんです。計算も余りできないけれども要領が良くなるわけですね。「こういうのは、こういうふうに解いたらいいな、こういう問題はこういうふうに解いたらいいな」と非常に要領が良くなっちゃう。だから物理の成績は割りにいいんですよ。ところが考えてみました。どうも物理学という学問はわからないんですね。どういう学問か分からないんです。物理の成績はいい成績なんです。ちゃんと優をとっている。外から見ればいい成績になるれども、私自身が物理学という学問がどうしてもわからない。つまり思考法が分からないんですね。どういう思考法なのか。どうも私の体質に合わないんですよね。例えば数学は割合に好きで、数学は分かるんですけど、物理学はわからない。そういうものってあるんですよ。それとこれも皆さんが考えるうえに大事なことだと思いますよ。これは自分に向いてない。凄く面白そうだけどやってみたい。だけどトコトンつめてみたら、どうも自分には向いてない。そういうのはありますよね。そういうのは、やはり向いてないんですよ。私は結局物理学って何だろうといって、分かるのは随分あとです。学問としての真髄が分かるのは随分あとですね。やっぱり向いているのは生物学なんですよ。結局、京都の理学部の動物学科に行きました。これは定員がたった５名ですよね。そんなところに入って、いわゆるサル学を勉強するわけですが、今でも良く聞かれます。どうしてサル学を研究するようになったのか。これは二つの大きな理由があります。一つは動物の生態社会を研究したいと思っていたんですね。もう一つは動物といったって、いろんな動物がいますが、特にサルを選んだというのは理由があります。私は戦中派なんですね。戦争にこそ行かなかったけど、友達は戦争に行って帰ってくるし、それから随分戦死もした。戦争は一番残酷で一番悲惨な出来事ですよね。そういうものを通じて、いったい人間って何だろうと考えざるを得なかったですね。あんな残虐な戦争をやる人間。ところが私の友達の中でも、こういうのがおりましたよ。いわゆる南京虐殺に参加した人もいるわけですよ。そして帰ってきて、何か話をするわけですよ。いわゆる中国人を殺した話もする。大変なことをやっているわけですよね。ところが田舎に帰ってくると凄くいい親父さんですよね。いいお百姓さんですよね。何か善の世界と悪の世界をポンポンと飛び越えている。人間って、そういう軽技みたいなことが出来る。それと善の世界と悪の世界がある。動物の世界を見ると善と悪の世界はないと思いますね。善悪の世界はない。悪の世界をもっているのは人間だけだと思いますね。私はこう思います。人間の最大の発明したものは何かというと、悪の世界だろうと思いますね。なぜ悪が生まれてきたのだろうか。これは一つの戦争体験を通じて、そう考えざるを得なかったですね。それで人間とは何かということ。これを極めようと思ったわけです。皆さんも、それぞれ自分とは何か。人間とは何か。こういうことを考えない人はないと思います。これはいろんな立場からの考え方があります。倫理学から哲学とか、あるいは仏教とか、いろんな考え方があるでしょう。私は自然科学者ですから、自然科学の立場から人間とは何かということを考えようと思ったわけです。そして、それはどうしたらいいか。これは簡単なことですね。人間という生物は、いつ、何処で、どうして生まれたのか。そして、どうして進化の道を歩んできたのか。そういう進化のレールの中に乗せて人間を考えてみようということですね。そうすると、我々の先祖は猿です。猿の幹から人間が分かれてきたわけですね。人間がどうして生まれたかということを考えるには、猿を調べるほかはない。そういうことで猿の社会、猿の生態を調べることにしたわけです。日本猿を調べまして、それから若い時ですから、とにかく新しいものに未知のものに挑戦しなければいけない。学問というのは世界的なものですね。日本で優れているというのでは駄目です。世界の場でどれだけの優れたことをやったか、それがいつも問われるのは学問ですね。猿学、霊長類学といいますが、これは戦後日本で起こってきた学問です。私たちが作っていたわけですが、だからある意味で世界のトップをいっておりました。日本猿をやったあとはチンパンジーとかゴリラとか、そういう類人猿をやらなければならないということで、私はゴリラの調査に参りました。この時は、1959年です。59年というと、アフリカの諸国はまだ独立しておりません。みんなまだ植民地時代です。まだ日本も本当に立派に回復してなかったですね。そういう所へ、今は海外へ簡単にどんどん行けますよね。当時はお金を持っていく、外貨が日本の10万円くらいしか持っていくことが出来なかった。非常に外国へ行くには制約がありました。それでも何としても、とにかくアフリカのゴリラをやろうと決心したわけです。私と大学院の学生と二人で行ったわけですが、勿論、お金がいります。それは、皆んな、いわゆる募金ですね。こういうことをやりたいので何とか資金を出して下さい。企業とかそういうところへ回るわけです。私だけではありません。私の仲間も皆んな手伝ってくれました。そういうお金も衣類も薬もみんな皆さんから貰っていって、そして貨物船で行ったんですね。貨物船も勿論ただで乗れたわけです。お金もありませんからね。何でも頼み込んで頼み込んでやってきました。その時に思ったですね。それから何べんもそういうことがありますけれども、やっぱり何かをやろうという時に一番大事なものは何でしょう。これは非常に簡単なことです。これは情熱と誠意それだけだ

と思いますね。この二つがあれば、ほとんどのことはやれると思いますよ。皆さんもそれは覚えておいてください。そのかわり、凄い困難がある。どんな困難があったって、猛烈な情熱と誠意があれば、ほとんど突破できます。勿論、出来ないこともあるでしょうね。けれども私の長い人生経験のなかでは、この二つが私の武器です。誰でも持てる武器ですね。これでいけば大抵の人は、何とか又助けてくれるものですよ。船に乗って1ヶ月。それでゴリラの調査、ウガンダとルアンダそれから当時はベルギーのコンゴその三つの国の境に大きなビルンガーブル系の山があります。富士山より高い山が７つあるんですね。そこにマウンテンゴリラが棲んでいるわけです。ゴリラを調べに行ったというと格好いいんですが、実は当時も私は肺活量が皆んなの半分、今でもこちらの胸は全然駄目なんですが、マウンテンゴリラがいるのは3000メートル、4000メートルの山なんですよ。そこへ登るというのはもう大変な地獄へ行くような苦しさですね。若い時っていうのは怖いもので、何とかそういうものを乗り越えていきました。それで行く時は皆んなに心配かけましたよ。アフリカというのは、まだ当時は、暗黒大陸という考えも強くて、人食い人種がいるとか、猛獣・毒蛇がいるとか、いっぱい心配されましたけれども、ただね、アフリカの田舎に行くとやっぱり同じ人間ですよ。皆さんいい人たちに出会ってホッとしたわけです。ゴリラの調査をしたわけですが、そこで時々大変なことがありました。ゴリラの調査はどうするかというと、ゴリラのことを良く知っている現地人にヤノワンダー族というのですが、ヤノワンダーの人を二人雇って一緒に行くわけですね。彼らは、やっぱり凄いですよ。山を登って行きますよね。そうするとゴリラが歩いた跡があるわけです。それを見ると、「これは一週間前だ」、「これは昨日だ」、「あっ、これは今日歩いた」と分かるんですよね。今日歩いたという跡を見つけると、そこをつけていくわけです。ゴリラが歩いた跡をつけて行くわけですから、必ずゴリラに出会いますね。その場合は谷あり、山があり、こちらはゴリラになるわですよ。息咳きって、ふうふう言ってゴリラに出会います。そうするとゴリラは一夫多妻で群れを作っているんですが、リーダーのシルバーバックといって、背中から腰にかけて銀色の毛が生えている。顔から何から真っ黒です。それが自分の仲間は逃がして近間に来るんですね。そして私たちを見ると「ウワァッー」と吠えるわけですよ。初めて聞いた時は、あの吠え声は本当に魂にグーンと突き刺さるようなものでした。私は調査に行っているわけですからね、普通だったら、そこでスッと逃げなければいけないんだけど、ゴリラを見たいわけだから、私たちは逃げないでしょう。そうするとゴリラは怒るわけですよ。それで猛烈な馬力で突進してきます。その時、どうしたらいいか。勿論、武器は何もない。そこでヤノワンダー族はこう言うわけですね。「絶対逃げてはいけない。ハッタと睨んでやれ」と、こう言うわけですよね。「それで逃げたら追っかけて来て、倒されて噛むぞ」と言うわけです。「一歩も退かないで睨め」と言うんですよね。ほんとか嘘か知らないですけれども、ゴリラが飛んで来るのは凄いですよ。私がグーッと睨んでいるわけですよ。そうすると本当に３メートル前で止まってくれるんです。そして「ワァーッ」と脅してスッと去って行く。英語でモックチャージと言っていますが、脅かしですね。ゴリラは賢いですからね。人間とまともにぶつかって喧嘩するのは馬鹿らしいから、そういうことで脅かしをかけるわけです。初めは本当に怖かったですね。そんなことをずっと繰り返しているうちに、こんなことがあったですね。その前に大分ゴリラとやりあいをしたことがあるんですが、道が曲がっている。鉤型にゴリラが歩いているんです。ゴリラの奴、物凄く警戒しているなとフッと見たら、ちょうど12、13メートル前にシルバーバックとメスと子供と昼寝をしていたんですね。私たちは本当に忍者のように山を歩けるようになっているんですね。足音をさせない。ヒュッと出たから、シルバーバックが物凄く怒って、凄い声を出して、メスと子供を逃がして、まっしぐらに飛んできたんです。私の前に案内人とトラックがいて、私が二番目に居た。それでいつものようにハタッと睨んだけど、止まってくれなかったですね。ガーンとぶつかっちゃって、ゴリラに突き飛ばされました。もう交通事故か何かなんだかわかんないですね。そして、前を見たら、ほんとに３メートルぐらい前に、私どもを見て「ウワァー」っているんですね。その下敷きにヤノワンダー人のバギルビィーラという名前の男が仰向けにひっくり返っているわけですね。ゴリラの顔はこんなんですよ。ギヤッてやられたらしまいでしょう。ところがゴリラは起き上がって、私どもに「ウーッ」といいまして、そこでウッとやったんだけど、こちらはツル草に囲まれて私がひっくり返ったままで身動きが出来ない。もう駄目だと思ったですね。ところが、このへんまで来てヒュッとターンをして向こうにいる、もう一人のトラッカーのウィンクルバリラーという汚い名前の男ですが、そこへ行って、立って殴りましたね。本当に。その時は不思議ですね。自分は安全なわけですよ。物凄くはっきり何がどうなっているか見えたんですね。スローモーションカメラを写しているように、はっきり見えます。立って、こうやって、彼はナタで上手く受けましたよ。ところが殴られて倒れました。そしてゴリラは、まっしぐらに私のところに飛んできた。「あぁー、もうこれは駄目だ」と思いましたが、私の前を通って逃げて行ったんです。そんなことで、皆んな怪我をしたんですけれども、向こうスネが凄く切れて血が吹き出ていましたよ。何でやられたのかわかりません。そんなこともあって、ゴリラの研究を、世界では本当に最初の頃ですね。かなりいい仕事が出来たわけです。けれども、そういう時は余り怖いと思わないですね。今だったら、ちょっとようせんですね。それはやはり若いということ、若さの特権だろうと思いますね。そしてゴリラの生態を知りたいという凄い情熱が、そういう怖さとか難だとか消してしまった感じが致します。こんなゴリラとの決闘とか面白い話があるんですけれども、時間がきたから、これで終わらせていただきますけれども、大事なことは皆さんを見ていると、やっぱり自分の若い時を思い出しますよ。残念ながら皆さんの頃は私は病気で寝ていたんですね。ずっと寝てました。ですから本当に羨ましいような気がしますよ。本当に燃え立つような皆さんの若い青春の輝きが見える。それを本当に大いに発揮して下さい。そして、必ず困難があります。それは今言った情熱と誠意があれば、絶対乗り切ることが出来ます。そして慌てることは無いですよ。２年、３年遅れるということは、どうということはありません。自分の将来が見つからなければ、ゆっくり構えればいいです。自分の進路がちゃんと見付かるまで、浪人するならしたらいいと思います。有名な進学学校ですからね、余り浪人されたら困ると先生方はおっしゃるかも知れないけど、それは自分のことですからね。何と言っても自分のことですね。自分を大事にして未来へ向かって薔薇色の世界を切り開いて下さい。そういうことを願って、ちょっと話が散漫になりましたけれども、終わらせていただきます。どうも、ありがとうございました。